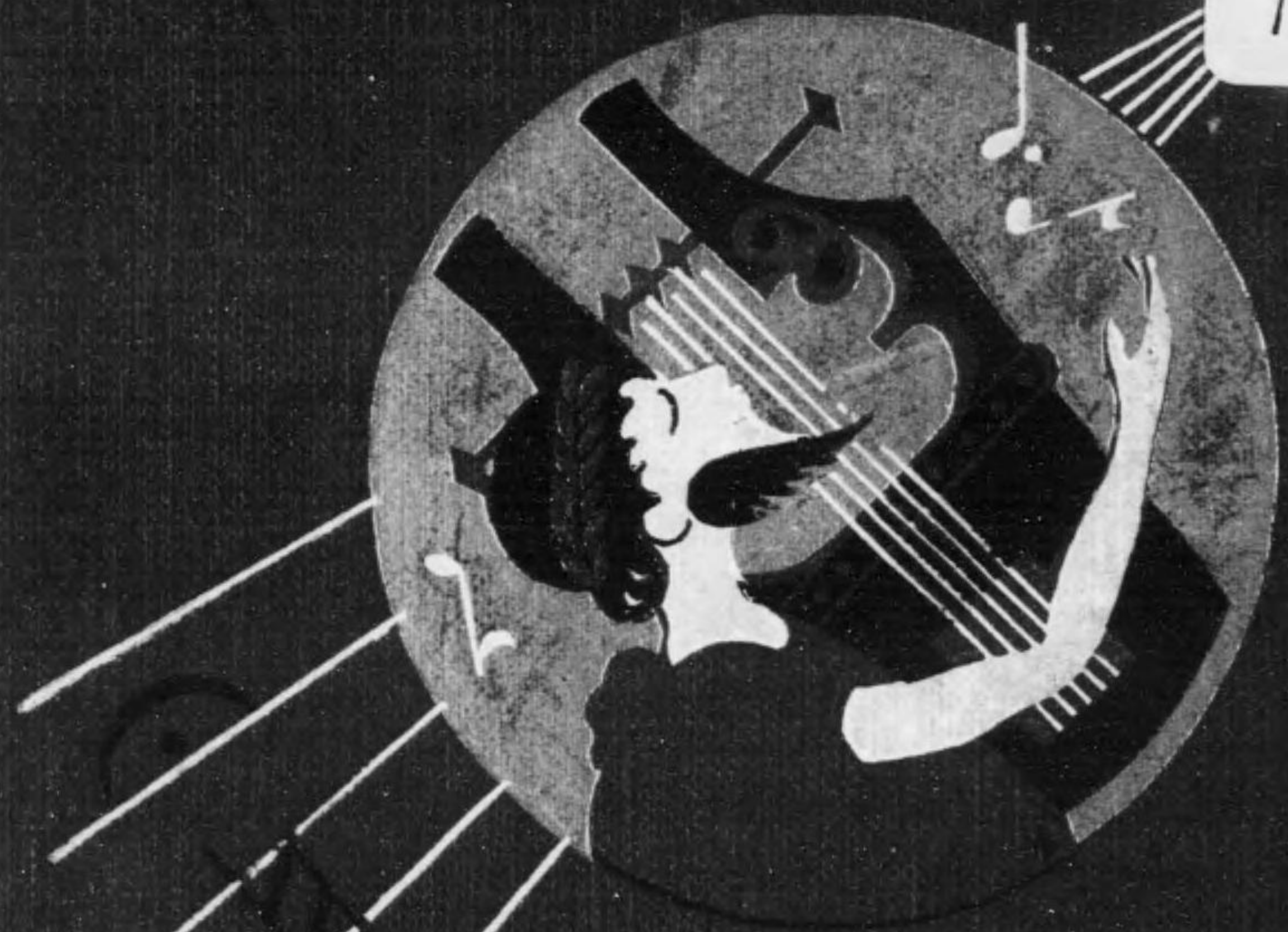


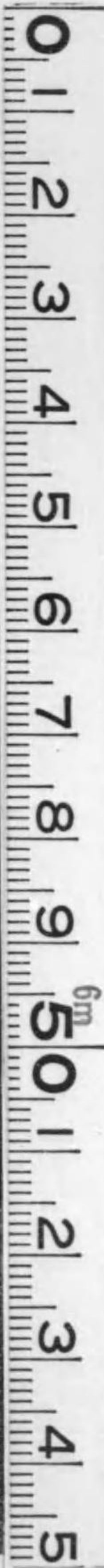
263,3

186



♪

小學歌唱教授
の
改善方案



始



2633-186



内藤俊二著

小學唱歌教授の改善方案

大阪三木發兌

大正
12.7 3
内交

緒言

近年小學校の唱歌は、日に月に改善を重ね、其の成績の見るべきものあるに至つたことは、國民教育の爲め慶賀に堪へない所である。私は過去十數年間、小學校兒童に唱歌を教授した經驗に基づき、僞らざる所感をとりまごめ、此の小冊子を公にすることゝしたのである。されど淺學菲才なるが上に文才乏しきが爲め、徹底せる理論に基づきたる説明の少きことゝ、思想の萬一をも文章に表はし得ざりしことゝを遺憾に思ふのである。幸にして此の冊子を公にするに就きて、前大阪府女子師範學校長大村芳樹先生の多大なる援助を受けたることゝ、大阪音樂學校長永井幸次先生及東京音樂學校講師草川宣雄先生の、周到なる校閲を受けたることゝ、

を衷心より感謝するものである。
此の書が唱歌教授上幾分の参考にも供せられるならば、幸之れに
若くものは無い。
書中の記事に關する批正と質疑とは、謹んで之れを受け、他日修
正改版する時の到るを待つものである。

大正十二年一月

著者謹白

目次

第一章 唱歌科教授要旨。……………一

第二章 教授細目編制上の注意。……………一四

 第一節 題目……………一六

 第二節 歌詞……………一七

 第三節 曲節……………一七

 第一項 音域……………一八

 第二項 音程……………二〇

 第三項 旋法……………二一

 イ、長旋法……………二二

 ロ、短旋法……………二四

ハ、 律旋法……………二六

ニ、 陰旋法……………二七

第四項 拍子……………二九

第四節 曲節と歌詞との調和……………三一

第五節 他の教科目との連絡關係……………三二

第六節 國民的題材を多からしむべきこと……………三三

第七節 趣味の配合及變化……………三四

第八節 郷土及地方的題材を多からしむべきこと……………三五

第九節 基本的題材及經過的題材……………三六

第十節 男女の性別及學年別……………三七

第十一節 基本練習曲を細目に入れおくべきこと……………四〇

第十二節 題材の數……………四〇

第十三節 文部省尋常小學唱歌取扱上の注意……………四一

第十四節 復習の歌曲を細目に入れおくべきこと……………四二

第十五節 細目中の歌曲は文部省の檢定済なるか、認可済なるべきか……………四三

第三章 基本練習の實際方案。

第一節 呼吸練習……………四六

第二節 發聲練習……………四八

第三節 發音及口形練習……………五五

第四節 音階練習……………五九

第五節 音程練習……………七〇

第一項 指唱法……………七一

第二項 視唱法……………九一

第六節	發想練習	九五
第七節	聽音練習	九六
第四章	樂譜教授の時期及方法	九七
第五章	唱歌科教授法	一一一
第六章	唱歌教室の管理及訓練につきて	一一九
第七章	唱歌教授の缺陷及其の救済方案	一二四
第八章	變聲期兒童の取扱	一四二
第九章	唱歌科の振興方案	一四六
第十章	唱歌科の設備	一五二
第一節	唱歌教室	一五二
第二節	樂器	一五四

第三節	教授用具	一五六
第十一章	唱歌教授上の注意	一五九
第十二章	小學校兒童に教授すべき樂典の概要	一六五

第一章 唱歌科教授要旨

教則第九條に、「唱歌は平易なる歌曲を唱ふことを得しめ、兼ねて美感を養ひ徳性の涵養に資するを以て要旨とす。」と

此の教則の趣意は其意誠に深く、唱歌科の目的を遺憾なく言ひあらはして居ると思ふ。先づ「平易なる歌曲」とは、題目歌詞及曲節の平易

雅正にして、児童の心情を純潔純美ならしめ、快活圓滿なる感情の養成上、最も適切なる題材を選択すべきことを意味し、題材選擇上の大方針を示したものである。

次に「歌曲を唱ふことを得しめ」とは、直接には唱歌の理解力を與へて児童を音樂的に陶冶すると同時に、耳と發聲機との發育を圖れよ、との精神である。小學校の諸教科目の内にて、右二つの重要機官の

發育をはかるべき教科目は、唱歌を措いて他には需められない。然るに兒童の他日成人した後には、其職業と地位との如何を問はず、自己の思想を談話演説或は朗讀等の形によりて、發表せねばならぬ場合がなかく多い。其時自分の思想を遺憾なく公衆に傳へ得る爲めに最も大切なものは音聲で、第二に必要なのは其話方の強弱緩急、即ち音樂的の發表である。海老名彈正氏の宗教談や久留島武彦氏の御伽噺が、強く深く聽衆の肝に銘せらるゝのは、無論兩氏の學殖の深遠なるに依ることは云ふまでもないが、兩氏の聲音と音樂的發表とが與つて力あること、思ふ。

偕この聲音の美化と聽力の發達とは、幾歲位の時が最も盛なるべきものなるかを、學者の研究に徴するに、男女共に七八歳より十四五歳までの間が最も旺盛にして、其後は年齢と共に段々と減じて來る

このことである。私は曾て六十五歳になつて唱歌を學習せんと、頗る熱心に研究された某小學校の模範校長に、唱歌を教授した事があつた。其時校長の耳は音の高低を聽きわける爲めに餘りに無能力で、其聲は僅に「ハ」より「イ」に至る六音が、あらく不調和に出る位であつた。校長は校長自ら唱歌を教授することが出來ないのにどうして部下の教員を督勵することが出來やうかといつて、本氣で練習された。私も此の校長の熱心に動かされて力の限りを盡して、其の教授に勉めたけれど、其進歩はまことに遅々たるもので一ヶ年餘に及びて猶樂器をはなれては、君が代の獨唱すらも出來なかつた。

此の外三十歳前後になつて練習を始める人にも、幾度か教へたことはあるが大抵は成效の見込が無かつた。

偕前に述べた七八歳より十四五歳までは、正しく小學校在學の時期

ではないか。是れ實に小學校に唱歌科の設置せられた所以である。歐米人にして大演説家たらんとする人は、先づ音樂を練習すること云ふことを耳にして居るが、之れも以上の精神から出たことと思ふ。然らば其の「よき聲」とは如何なる要件をそなへなくてはならないか。

- 一、明瞭 發音及發聲の明瞭なる聲。
- 二、自由 高低長短及強弱の自由なる聲。
- 三、充實 音量豊富にして人を魅する力ある聲。
- 四、共鳴 發聲やはらかにして耳ざはりよく、口腔
喉頭及鼻腔等の共鳴ある聲。

以上の四要件である。

然るに現今多くの小學校兒童の唱歌は、聲を美化する爲に、幾何の

價値を有して居るであらうか。曾て維納の喉頭専門醫ストーク教授が、彼國の合唱教授の取扱に就いて、次のやうな非難を擧げて居るが、我が國の現状とあまりによく似よつて居るから、参考の爲め次に掲載することとした。

兒童の合唱は疑もなく、彼等の聲音を破壊するものである。吾人は之に就いて若干の見聞によつて、少しく自分の考を述べて見たい。兒童は七八歳乃至十二三歳頃までは、其喉頭筋組織は至つて軟弱である。此の軟弱なる喉頭筋を以て彼等の能力を害することなしに、長時間歌ふと云ふことは、全く不可能の事である。この年齢頃の兒童は、尙ほ未だ自己の唱歌の疲勞に就いて、自ら其筋の疲勞を感知することが出来ない。斯くて兒童は辛うじて歌つて居るのに、教師も亦之れに對して唯表面的にばかり見て居る。そ

ここで兒童は長い間歌つて居る中に、だん／＼と其筋力が疲れて來て、益過度の努力を拂ふやうになつて來る。果は隣席の兒童と聲を競つたり、他の聲を壓しつけて、歌つたりするやうになつて來る。斯の如くにして唱歌の教授を繼續する時には、遂には其過度の勞作のために、其最もよき聲音と發聲機官とを、全く破壊して仕舞ふ。

六

是れ明に現今唱歌教授の通弊であつて、誠に憂慮に堪へない次第である。斯くて教師は生徒に壓迫を加へて居る。是れ明に唱歌教授の本旨でないのみならず、寧ろ合唱教授の濫用悪用である。云々

私共も此の非難に對して、猛省を加へねばならぬ。

次に「美感を養ひ徳性の涵養に資する」と云ふことも、大切な目的であ

るから、御互に其徹底に勉めなくてはならない。此の事は容易になり得らるゝ事柄であるにも係らず、比較的實行の出來てゐないことのやうに思はれる。然らば其の方法は如何にすればよろしいか。

其れには最適當なる「唱歌科教授細目」を編制し、其の歌曲を正しく教へ、曲想をつけ、歌詞の説明をなし、尙反復練習を重ねて、歌曲の習熟を期し、兒童をして全く歌中の人となり、我を忘れて唱ふやうに到らしめるのである。「京の五條の橋の上」と唱ひ出せば、兒童は直に肉躍り血湧き、自ら輕快不思議の小冠者牛若となりたる思をなし、驍勇無雙の辨慶が、渾身の勇を鼓して撃つてかゝる薙刀の下を、飛鳥の如くに右往左往變幻出沒、爲めに流石の辨慶も術を施すに由なく、徒に困憊遂に低頭平身、降參の己むなきに出でしめ、「鬼の辨慶あやまつた」と唱ふに至り、覺えず戦勝の快感を叫ぶの状態にまで、

七

到達せしめねばならない。

快活、優美、雅正の情も、豪壯なる元氣も、無邪氣なる愛情も、皆斯くの如くにして養成せられるのである。それ故に各學年に於て教授する歌曲は、其數の多きを貧らすして習熟を旨とし、一曲が十分出來上がりて後、次の曲に進み、其上常に既習の歌曲を反覆練習して、趣味の増進と樂曲の理解とにつとめねばならぬ。

藝術は細密なる點に到るまで、徹底的に批正することによりて、其の進歩を認め得るに至るものなることを忘れてはならぬ。

先年某縣師範學校を卒業し、某小學校に赴任した友人があつた。君は性來音樂が好きな方であつたけれども、師範學校在學中は、不幸にも病氣勝で缺課も多く、好める樂器練習も意の如く出來かね、不本意ながら卒業して前述の小學校に就職し、尋常科五學年女の擔任

となつた。其の當時兒童は元氣に乏しく、話方の聲も小さく、讀方の聲も聞こえぬ位で、運動場で活潑に遊びまはることは無論しなかつた。其の時友人は種々熟慮の結果、唱歌を利用して快活無邪氣なる兒童たらしめんものと思ひ、色々と苦心して教材を選択し、熱心に之れを教授したけれど、兒童は趣味を以て唱はなかつたから、女生徒としてはふさはしくなかつたけれど、軍歌調の歌曲を教授して、元氣よく唱はせることをつとめた。此の様に熱心に教授すること數ヶ月間にして、兒童の聲音は大分明瞭となり、音量も増加し、進んで獨唱するものさへ出來るやうになつた。友人は大に喜び彌々熱心に努力した結果は、遂に唱歌科の上にあらはるゝばかりでなく、朗讀及談話の明瞭となり、發問及應答の正確となり、遂には運動場に於ける活動にあらはれ、一ヶ年餘にして見ちがへる程の優良學級と

なつた。このことである。

樂聖ベトーベンは、「音樂は人間の靈火を發揮せしむるものたるべし。」と云つて居る。是れ聲や指先にて眞の音樂の演奏せらるべきものにあらず、制し難き熱情と生氣とが、聲樂又は器樂にあらはれて、初めて德育的價值を有する、眞の音樂となることが、出來ると云ふ意味であらう。今一度云ひかふれば、精神の入らざる音樂は、教育的價值なしとの意である。

世界の藝術大家ロダン氏は、「形にも線にも色彩にも、表現的でない餘計な所が少しもなく、あらゆる部分が思想と心靈とを表現してゐる者を稱して、最も至純な傑作と呼ぶ。」と云つて居る。是れ誠にベトーベン先生の言葉と、符節を合する様に一致して居るではないか。ベトーベン氏又曰く。「若し人生より音樂を取り去らば、吾等の生活

は水無き砂漠を旅行するが如し。」と實に味はふべき言葉である。

博士リヒトワルク氏の人格論に曰く、「音樂は人間の感動を擁護する所以の學科である。感動の擁護は從來非常に等閑に附せられて居つた。誰人も感動を陶冶せんとして、有意的具案的に着手せんとした者がなかつた。余は機械的圖書を排し、文典の外形的訓練を非難すると共に、趣味あり快味ある音樂によりて、純潔なる感情の陶冶を奨励せんとするものである。」云々
マルチンルーテル氏曰く。「唱歌の歌へぬ者は學校教師たる資格なし。」と

音樂と社會と如何なる關係を有するか。之れを歴史上より研究すれば、純潔の間に崇高の想深き神代の音樂は、仙人的世界を想像せしめ、優美艷麗なる奈良朝時代の音樂は、當時の人情風俗を明に代表

し、質朴なる鎌倉時代の音楽は、鎌倉武士の精神を發揮する爲めに、遺憾なきことと思ふ。現代の音楽につきて之れを観るに、雅樂と謠曲とは壯年以上の人に謠はれ、俗樂と俚樂とは民間の音楽となり、所謂洋樂は學生の音楽となつて居る。是れ亦各其の社會團體の人情と、相一致して居る明かな證據ではなからうか。我が國の音楽は我が國民性を代表し、西歐の音楽亦各其國民性をあからさまに映して居る。西歐の人が始めて本邦に來りたる時、先づ音楽を聞きて大體の國民性を推定すると云ふことも、度々耳にする所である。曾て廣島高等師範學校附屬小學校に於て、尋常科一學年及二學年の修身科を廢し、唱歌科を以て之れに代へたことがあつたのも、幼稚なる兒童に對しては、理性より入る訓話よりも、感情より入る唱歌の方が、効果の多い事を認めた爲であつたらう。

世間往々にして唱歌科の徳性涵養を疑ふのみならず、却つて徳育上の妨害をなすなど、随分無鐵砲な考を持つ人を見受けることがあるが、それは無鐵砲を云ふ人が悪いのではない、御互に唱歌教授に當るものが、大に反省すべきことだと考へるのである。以上述べ來つた様な譯で、文部省の唱歌科教授要旨の精神は、非常に深遠にして徹底的のものであるから、其の要旨に叶ふやうにするには、多大の研究と勤勉とを要する。御互に出来る限り奮勵努力、以て其の教則の要旨に副はんことを期せねばならない。

第二章 教授細目編制上の注意

一四

唱歌の趣味と其の教育的價值とは題材の良否(適不適)によりて、其の大半を決定するものである。然らば教授細目の編制には如何なる注意を要するか。

一、教則第九條第四項に、「歌詞及樂譜は平易雅正にして兒童の心情を快活純美ならしむるものたるべし。」と

二、教則第九條第二項及第三項に、「尋常小學校に於ては平易なる單音唱歌を授くべし。高等小學校に於ては前項に準じ、漸く其程度を進めて授くべし。又便宜簡易なる複音唱歌を授くることを得。」と

右小學校令施行規則は細目編制上の大方針にして、之れを分解詳述

すれば、左の諸項目となる。

- 1、題目。
- 2、歌詞。
- 3、曲節。
- 4、曲節と歌詞との調和。
- 5、他教科目との連絡關係。
- 6、趣味の配合及變化。
- 7、國民的題材を多からしむべきこと。
- 8、郷土及地方的題材を多からしむべきこと。
- 9、基本的題材及經過的題材。
- 10、男女の性別及學年別。

一五

- 11、基本練習曲を細目中に入れおくべきこと。
- 12、題材の數。
- 13、文部省尋常小學唱歌取扱上の注意。
- 14、復習の歌曲を細目中に入れおくべきこと。
- 15、細目中の歌曲は文部省の檢定済なるか認可済なるべきこと。

等數多の條項がある。左に之れを簡單に説明せん。

第一節 題目

- イ、題意明瞭にして且歌詞の内容を總括したるものなるべきこと。

- ロ、兒童の性情及日常生活に適應したるものなるべきこと。
- ハ、同種類の題目に偏することなく、各種の方面より各種の感情陶冶の目的を達し得べき、題材を選ぶべきこと。

第二節 歌詞

- イ、其程度は國語科の程度に準據すべきこと。
- ロ、内容の教育的價值あるべきこと。
- ハ、文章及記載の事項に誤なきこと。
- ニ、快活、優美、勇壯、元氣、等各種の感情陶冶の價值を有するものなるべきこと。

第三節 曲 節

本節を音域、音程、旋法、拍子の四項に分けて説明せう。

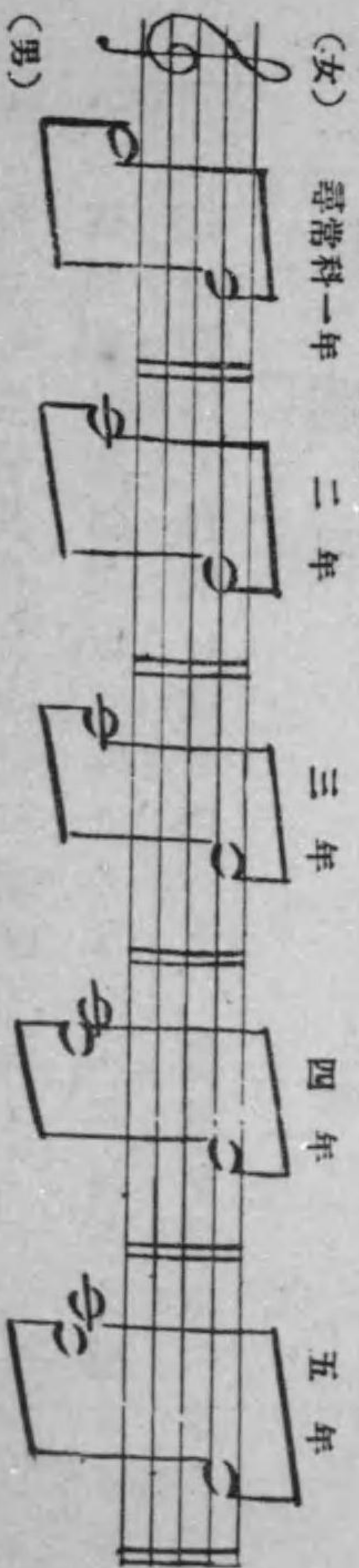
第一項 音域

左に参考となすべき数種類の音域を記載せう。

- (1) 文部省尋常小學校附屬小學校に於て兒童を個人的に調査したる音域
尋常科一年 二年 三年 四年 五年 六年



- (2) 廣島高等師範學校附屬小學校に於て兒童を個人的に調査したる音域

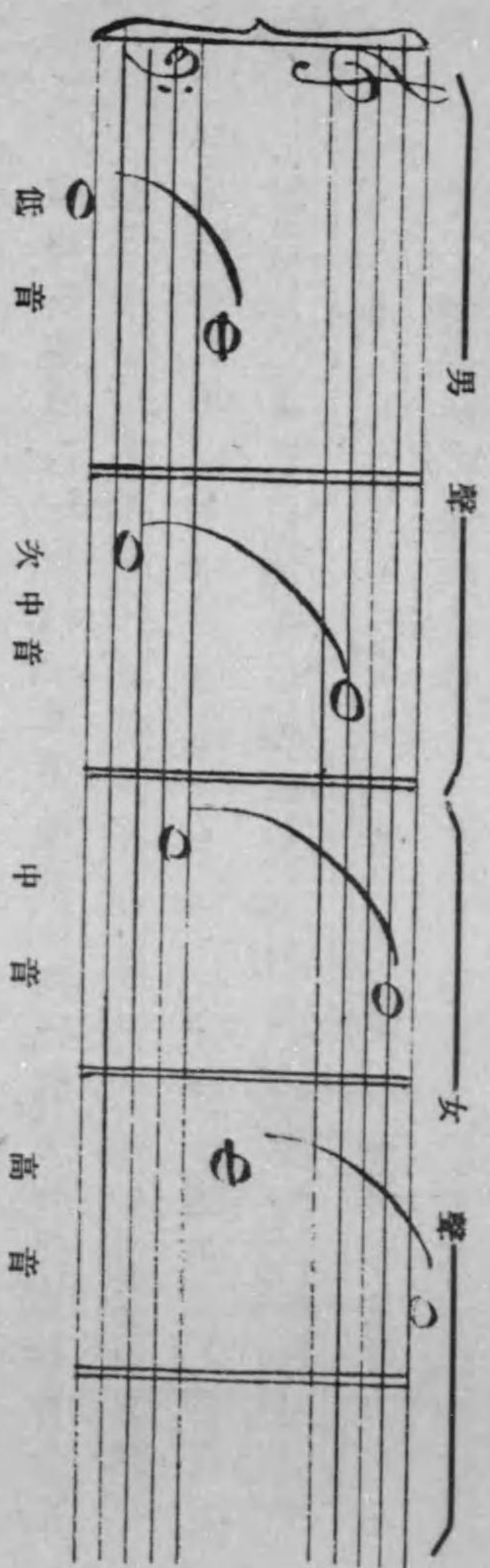


- (3) 兒童は練習によりて左記の音域と成し得るものである

(京川氏調査)



(4) 成年の音域



第二項 音程

- 尋常科一二學年 五度以内
- 同 三四學年 六度以内
- 同 五六學年及高等科 八度以内

然し之れは大体より見たるもので、多少の例外は免れぬ。

第三項 旋法

西洋樂の旋法には長旋法と短旋法との二種類がある。長旋法は多くの場合勇壯快活なる樂曲を作る爲めに用ひ、短旋法は悲愴的なる樂曲を作るに用ひらるゝものである。それ故に長旋法によりて作られたる樂曲には、元氣なるものも多く、短旋法によりて作られたる樂曲には、感情深き曲節が多い。小學校用題材として、右二種類の旋法を如何様の割合に採用すべきかと云ふに、唱歌科教授要旨より推定しても、兒童の心理上より考へても、長旋法の歌曲を主とせなくてはならぬことは勿論である。文部省尋常小學唱歌中、長旋法の樂曲は百十一曲で、短旋法の樂曲は橘中佐(四年)菅公(五年)三才女の後半(五年)水師營の會見(五年)大塔の宮(五

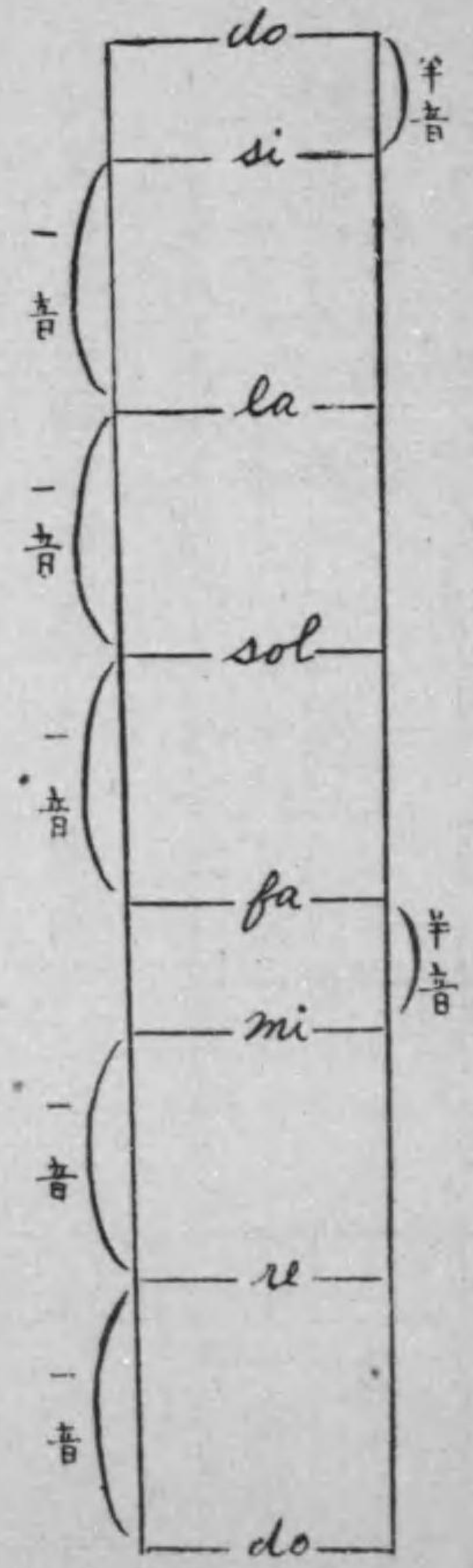
年(兒島高德(六年)鎌倉(六年)の七曲である。

日本樂には律旋法(雅樂調陰旋法(箏曲調)の二種類がある。此兩種の旋法によりて成れる歌曲は、通俗的なるが故に、興味を以て迎へらるゝ歌曲が多いけれど、感情陶冶上より之を觀る時には、採用するに躊躇せねばならぬ樂曲が澤山ある。

さて以上四種類の旋法は、如何なる音階によりて出来て居るか。又或る樂曲は何れの旋法に屬するものなるかを見分る爲には、如何にすべきか。次に之れを簡単に説明しよう。

イ、長旋法は長音階によりて作られた樂曲である。長音階は第三音と第四音との間、及第七音と第八音との間に、半音程を有し、其の他の二音間は何れも全音程を有する、八个

の音の列りによりて成る。



長旋法によりて作られたる樂曲は、第一音(do)第三音(mi)第五音(sol)及第八音(do)中の何れかにて始まり、樂曲の最後は多くの場合第一音(do)或は第八音(do)である。

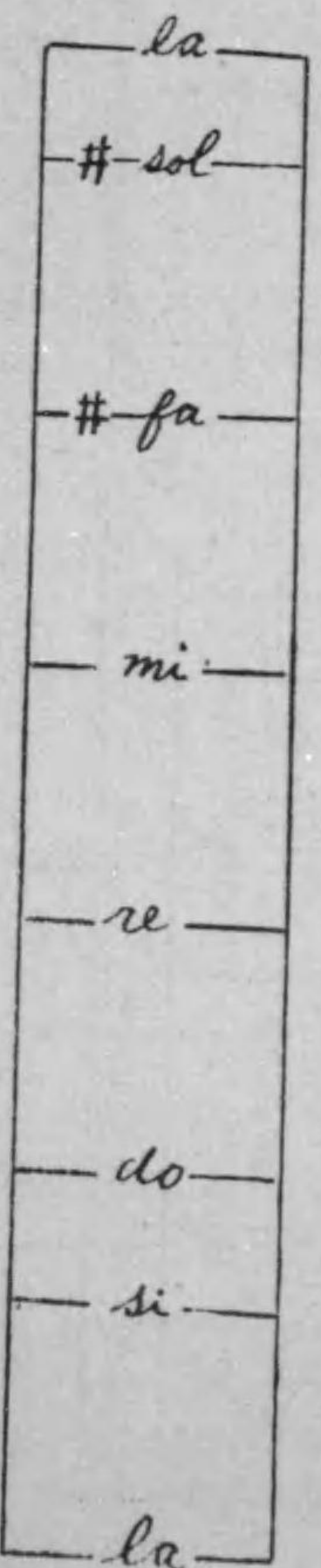
— 35 —
中の何れかにて始まり

3 2 1
7 2 1
2 7 1
5 5 1

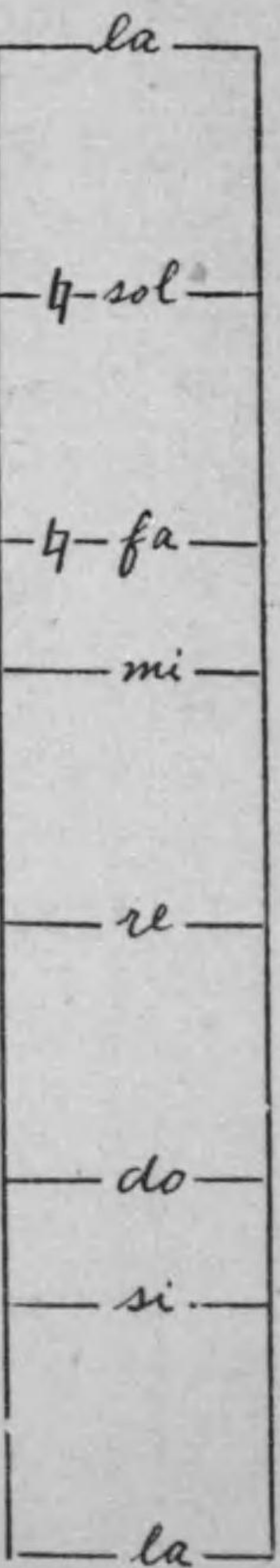
と云ふやうな形ちで終るものである。

口、短旋法とは短音階に屬する旋法である。短音階には三種類あるが、唱歌の場合に用ふるのは、**・** 旋律的短音階である。旋律的短音階は、上行と下行と、其の音程を異にして居ること、次の圖の示すやうである。

上行



下行



短旋法によりて成れる樂曲は、短音階の第一音(la) 第三音(do) 及第五音(mi) 或は第八音(la) 中の何れかにて始まり、樂曲の最終は多くの場合第一音(la) 或は第八音(la) である。

6 3 3 6 } 中の何れかにて始まり

6 #5 6 1 } と云ふやうな形で終るものである。

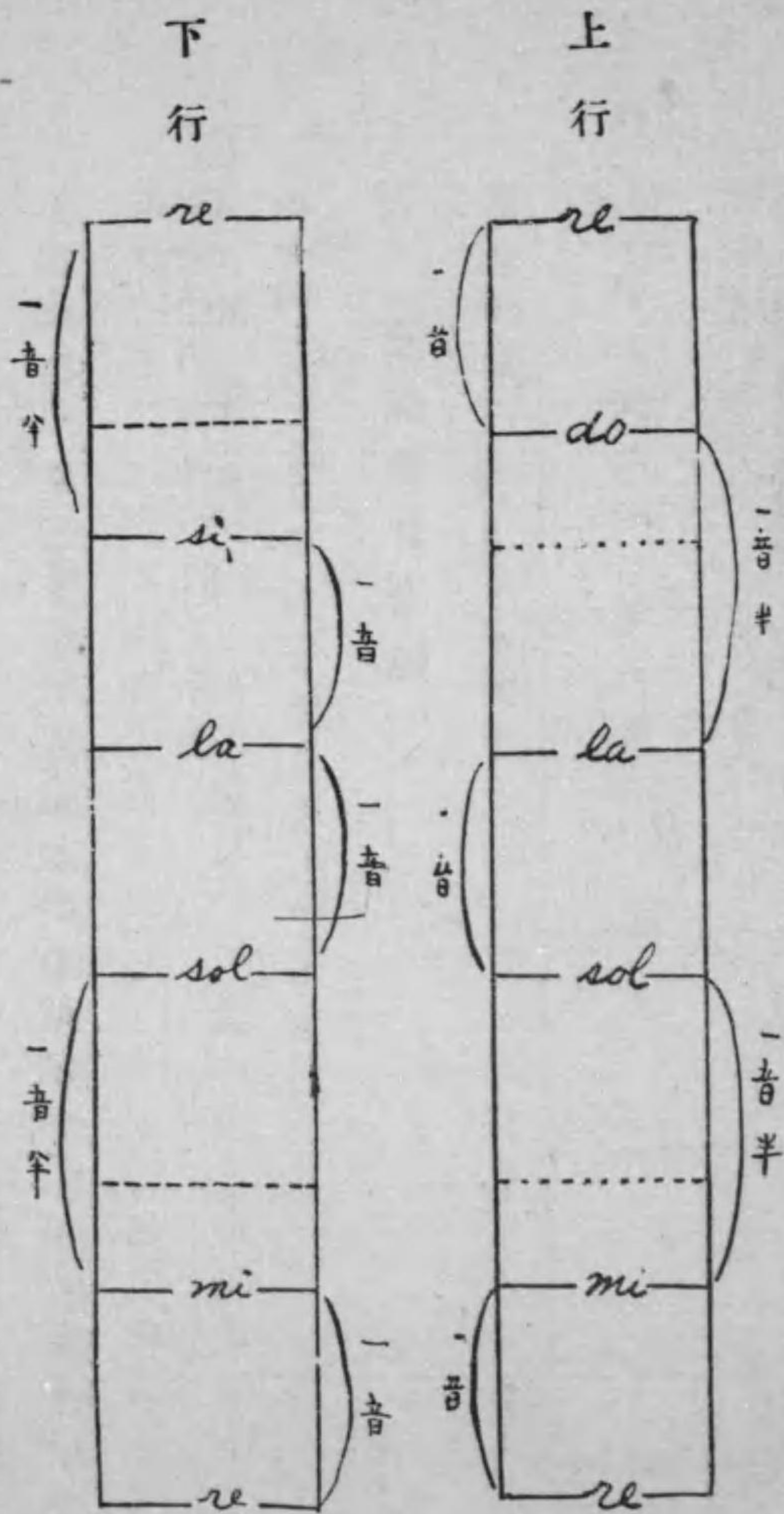
ハ、律旋法雅樂調は古代支那樂の日本化したるものであつて、
 「君が代」とか「白蓮白菊」の如く、頗る高雅清楚な調である。然
 し此旋法によつては壯大豪壯の心情快活元氣の氣象をあら
 はすことは、頗る困難であるから、小學校用の唱歌として
 は、餘り多く採用されて居ない。此の旋法の特徴としては
 ・ $2\ 7\ 6\ 5$ の如く、 2 より i を経ずして、下行することが普
 通である。

猶此種類の樂曲は雅樂調の第一音(re)で終るものである。

NS } 中の何れかにて始まり

$2\ 1\ 2\ 1$
 $2\ 2\ 1\ 1\ 2\ 1\ 0$ } のやうな形で終るものである。

雅樂調音階圖



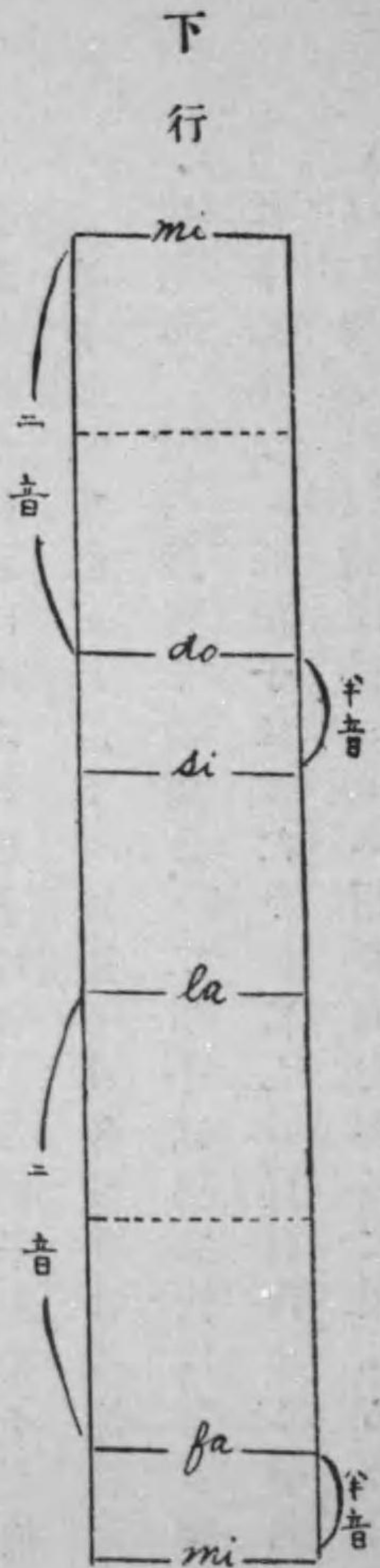
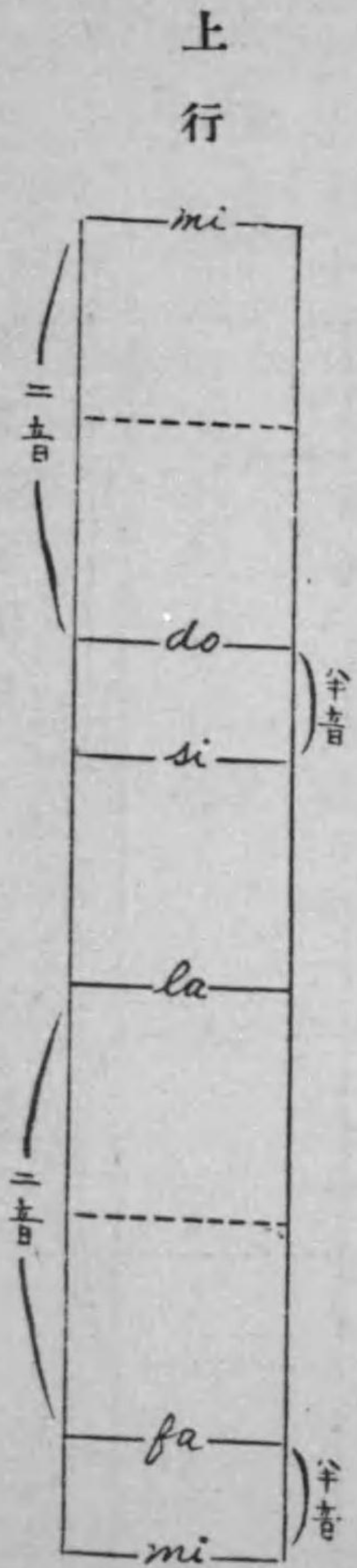
ニ 陰旋法は名の如く陰鬱な旋法で、此の旋法ほど悲哀憂鬱な
 調は少い。それ故に小學校の題材としては、此の旋法に屬

する楽曲は極めて少いのである。此の旋法の特長としては、7 6 4 3 の如く、6 より 5 を唱はずして、直に 4 に至ることである。尙此種類の楽曲は、(mi) で終るのが普通である。

♩ 中の何れかにて始まり

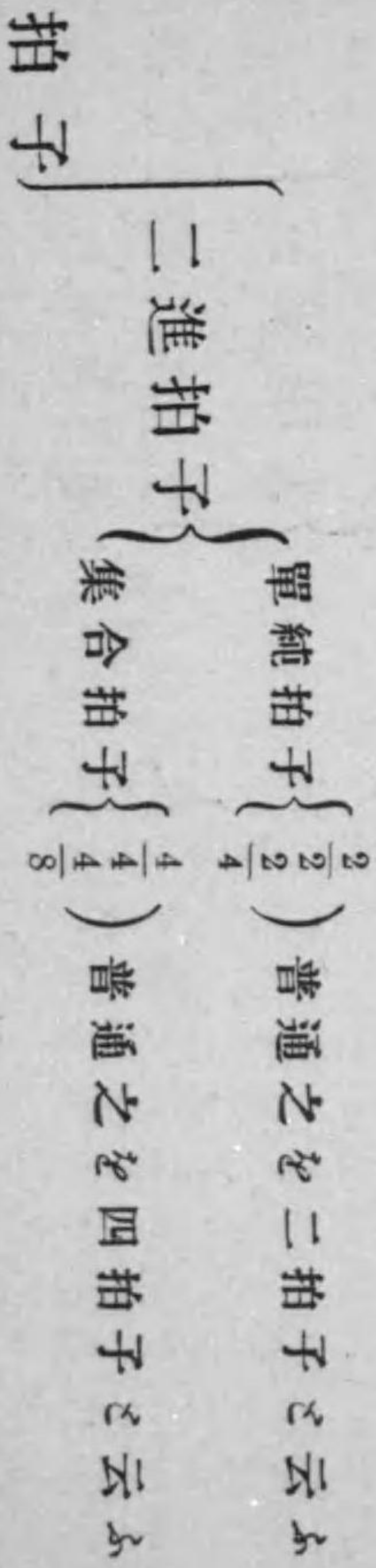
♩ 6 4 3 — のやうな形で終るものである。

陰旋法音階圖



第四項 拍子

拍子の種類



して美しく唱はしむるばかりでなく、やがては國語のアクセントを一定する様にしたいものである。此のアクセントにつき深き注意を拂はれたのは、文部省の尋常小學唱歌である。

第五節 他の教科目との連絡關係

唱歌と連絡をはかるべき教科目は、修身國語歴史地理圖書手工体操遊戯等が、その主なるものである。幼學年に於ては特に國語及修身と連絡をはかり、學年の進むにつれて、歴史地理等と連絡をはかるやうになる。此の連絡は常に教材上の連絡のみに止らず、教育的陶冶を中心としたる。精神的の連絡でなくてはならぬ。連絡ある題材を教授せんとする時には、他の教科目に於て題目事項の大半を、教授したる頃より唱歌を始め、雙方相並びて教育的

教授の徹底をはかり、尙最後に於て總括的に、唱歌によりて結びをつけること云ふ順序が、最も普通の方法である。然しながら他の教科目との連絡を主として題材を選択するは幼學年であつて、上級學年に進みては唱歌科題材前後の關係を主として、選曲すべきことを忘れてはならぬ。

第六節 國民的題材を多からしむべきこと

近頃人心の浮薄に傾き易きにつれて、唱歌も其影響を受け、兎角軟弱に流れて、淫靡なる歌曲又は滑稽にして誠意なき歌曲を愛好し、之れを唱ふに方りても外面的藝術的に走りて赤誠少く、國民的精神の涵養、剛健なる思想の養成上、遺憾なる點が少くない。小學校の唱歌は娛樂の爲に課するものでは無い。それ故に藝術的

たると共に精神的たることを忘れず聲で唱へると共に心で唱はせたいと思ふのである。従つて其題材及曲節を選択する場合にも、以上二つの大切なる點を考慮し如何なる國民を作るべきか、如何なる校風を養成すべきかと云ふことを、主要條件とせねばならぬ。此の意味より國民的題材の、より多からんことを切望して止まないものである。

第七節 趣味の配合及變化

國民的題材を多からしめたきは、前述の通であるけれども、唱歌は審美的情操の陶冶もせねばならず、圓滿なる感情も養成せねばならぬ。それ故に同趣味の題目をのみ選びて、唱はせるわけには行かぬ。なせならば同趣味なる楽曲の繼續する時には、兒童に快

感を與へざるばかりでなく、かたよりたる感情の養成となるからである。

歌曲には勇壯なるもの、豪壯なるもの、優美艷麗なるもの、輕快なるもの、無邪氣なるもの、高尚雅正なるもの等、色々の種類があるから、題目歌詞、旋法、旋律等につきて精しく研究し、同趣味の楽曲にかたよらぬ様に、ほどよく配合せねばならぬ。

第八節 郷土及地方的題材を多からしむべきこと

郷土は兒童と最も親密なる關係を有するものなれば、地理歴史等に於て郷土を出發點となすが如く、唱歌に於ても學校、郷土、郡、縣等の、郷土的題材をより多く加味して、細目を編制することは、唱歌科の教育的價值を多からしむる爲めに、頗る大切な事柄であ

る。

この意味より校歌、郷土歌、郡歌、郷土に關係ある人物の頌徳歌、地理的及歴史的歌曲の調製が望ましいのである。

第九節 基本的題材及經過的題材

唱歌が家庭及社會に普及せざるを、慨歎するの聲をきくこと既に久しいのにも係らず其實績の擧らざるは、其原因する所幾多あるべきも、學校唱歌の題材が年々歳々變更し、兒童が學校にて學習する歌曲は、家庭には誰一人知る人も無きが爲め、自然趣味も少く、批判も出來ず、従つて兒童も家庭に於て唱歌することが何となく張合わるく、かくて互に相離れて、無頓着になり易き傾向を生ずること、確に有力なる原因の一つである。此の意味より各

學年各學期に、一二曲づゝ中心となすべき歌曲を選定し、其の歌曲は幾年も變更すること無く教へたいと思ふのである。是れ唱歌科題材の統一を計り、方針を一定するが爲めに、有力なるばかりでなく、唱歌普及の方法として大切なる事柄と思ふ。この基本的題材の他は、之れを經過的題材として取扱ひ、兒童の成績と進度とに應じて、適當に變更し改良して行くやうにしたならば、統一ある題材の外、偶發的新樂曲の教授も出來、頗る好都合のことと思ふ。

第十節 男女の性別及學年別

男女の性別的取扱は、近年次第に其勢力を失ひ小學校の教育は勿論のこと、中等程度の教育に於ても、裁縫手藝の如き特殊的性質

を有するものゝ外は、男女同一に取扱ひたいと云ふ思潮に傾いて居る。

獨り唱歌は兒童の發聲上の都合より、自然教材を異にして教授して居る學校が多いやうであるが、之は尋常科初學年に於ける唱歌教授が、男兒童に對して不十分であるから、高學年に進むに従ひ次第に發聲上の困難となり、遂には題材を二様にも三様にも、しなくては授業の出來ぬやうになるのである。それ故に、尋常科低學年に於て、兒童の發聲を十分に矯正し、唱歌上の基礎を作り上げたならば、五六學年に到りても性別的取扱を爲すべき必要を認めざるのみに非ず、男兒は溫和なる性質を養成し、女兒は快活無邪氣なる良性質を養ふに至るものである。

然し現今多くの小學校に於て、性別的取扱を爲しつゝある折柄な

れば、参考の爲め次に性別的取扱の一端を記しておく。
尋常科一二學年の兒童は、男女の性別少く、女兒も勇ましき歌曲をも好み、男兒もやさしき無邪氣なる樂曲を愛好するものである。それ故此學年に於ては、全然男女共通の題材として差支は無い。童話的歌曲は此學年に最も適する。三四學年の兒童は男女の兩性に分れんとする準備時代、即ち其經過時期と見てもよからう。そして此學年の兒童は、男女共に勇壯快活なる歌曲を好み、歴史的題材は此學年に適する。五六學年に進みては男女の特性幾分か發達し、男兒は勇壯なる歌曲、女兒は優美艷麗なる歌曲を愛好するやうになるから、この學年より男女の學級を別々にし、ふさはしき題材にして、音樂的趣味に富める樂曲を選択せねばならぬ。

第十一節 基本練習曲を細目中に入れおくべきこと

唱歌の實力養成上基本練習の非常に大切なことは云ふまでも無い
 ことで、是れによりて發聲が奇麗になり、音程及拍子の實力が出
 來て簡單なる歌曲は獨りで唱ひ得るやうになるものである。それ
 故に係統ある基本練習曲を作り、之を各學年に順序よく配當し、
 歌曲を教授すると同様に、練習を爲したいと思ふのである。

第十一節 題材の數

唱歌科教授要旨の章に於て述べたやうに、題材の多きに過ぎ不徹
 底に陥ることは、却つて教育的價值を減殺せしむるものであるか
 ら、少くして熟達せしむることを目的とせねばならぬ。

此の意味より、各學年とも、

一學期 五曲

二學期 五曲

三學期 三曲

を標準として丁度よいと思ふ。

第十三節 文部省尋常小學唱歌取扱上の注意

大正五年六月東京高等師範學校に於て、初等教育研究會(唱歌科)開
 催の節、文部省普通學務局の澁江先生の話によれば、「唱歌は地方
 によりて其の進歩の程度を異にし、又郷土的題材加味の必要もあ
 れば、尋常小學唱歌は他の國定教科書の如く、何れの學校も必ず

採用せねばならぬ、と云ふ意味のものでは無い。云はゞ唱歌科の教材供給に過ぎないから、適宜手加減して取扱つかつてもらひたい。」とのことであつた。

第十四節 復習の歌曲を細目中に入れおくべきこと

習熟を目的とする本科に於ては、同學期中、同學年中、又時によりては前學年中に教授した歌曲をも、何等かの連絡によりて、度々練習し、歌曲に熟達すると共に精神教育の徹底を計らねばならぬ。又下級學年の教材を輪唱或は復音となして、上級學年に於て教授することも、新なる興味をひき起し、頗る面白い方法である。此の意味より細目中に復習の歌曲を入れ置き、記入されたる歌曲は、是非共復習するやうにしたいと思ふのである。

第十五節 細目中の歌曲は文部省の検定済なるか、

認可済なるべきこと。

近頃童謡の流行につれて、歌詞又は歌曲の如何はしきものを教授して居る學校も少なくない様である。検定済又は認可済以外の歌曲中にも、非常なる名曲も澤山あることであるから、學校組合、又は郡教育會によりて、之れを選定し、文部省に認可願を出し、認可されたる楽曲を採用するやうにしたいと思ふ。然しながら時代の趨勢によりて曲風も段々と變り行くものであるから、近時の如く童謡の流行甚しき時に當りては、普通の歌曲のみを授くる時には兒童に満足を與へ兼ねるものであるから、心情をそゝる様な歌曲をも撰ばねばならぬ。

以上十五ヶ條を細目編制上の準據として、權威ある教授細目を作り、

第一學期

週	一 二 三
基本練習	(1) 氣息練習 (2) 發聲練習 (3) 音階練習 (4) 音程練習 (イ) 本譜視唱法
	(ロ) 豫備音程 (本譜視唱法)

春の野 新編教育唱歌集

♩ = 100 mp

一、 ナ タ ネー ノー ハ ナ ニー ト ア コ チョー
 二、 わ か くー さー も ゆ るー な か の う へー

ア チ ソー ラー タ カ クー ナ ク ヒ バ リー
 の ご けー きー ひ か げー あ み な が らー

イ ー ツ レ カ ハ ラ ヌ タ ノ シ サ チー
 や す ら ひ な れ ばー そ よ そ よ きー

ウ タ フー カー ハ ル ノー ノ ニ イ テ テー
 そ で ふー くー か ぜ のー こ ゝ ろ よ きー

ト 調 練 習 曲
 季 節 的 題 材

一、春の野

一、菜種の花に飛ぶ胡蝶 青空高く啼く雲雀
 いづれ變らぬ楽しさを 歌ふか春の野に出でて

二、わか草もゆる岡の上 長閑けき日影あみながら
 やすらひ居ればそよくと 袖ふく風の心よさ

三、たんぼ、嫁菜、つくくし 手籠に入れて持歸る
 野邊の畔道面白や 明日もまた來ん打ちつれて

春の野原の情趣を面白く寫
 兒童の心理に合致した歌で
 「雲雀」燕雀類中ひばり科
 て稍大形である。頭、背は
 白色、後趾の爪は長直であ
 春季晴朗の日には飛揚して
 「若草」は芽だちの草、な
 草のことである。
 「もゆる」は萌ゆるで芽を
 出せる意。
 「長閑けき」は空晴れて天
 日和のおだやかなことであ
 あること、おちつきてしづ
 「あみ」は浴するといふ意
 ここと「やすらひ」は休息の
 「つくくし」は土筆のこ
 ら生する子囊群の稱である
 がある。食用とすることが

春の野

花に飛ぶ胡蝶 青空高く啼く雲雀

變らぬ樂しさを 歌ふか春の野に出でて

もゆる岡の上 長閑けき日影あみながら

ひ居ればそよくと 袖ふく風の心よさ

嫁菜、つくくし 手籠に入れて持歸る

の畔道面白や 明日もまた來ん打ちつれて

春の野原の情趣を面白く寫し出してゐる。實に兒童の心理に合致した歌である。

「雲雀」燕雀類中ひばり科に屬する鳥、雀に似て稍大形である。頭、背は暗灰色で、胸腹は灰白色、後趾の爪は長直である。地上に巢を構へ春季晴朗の日には飛揚してよく囀る。

「若草」は芽だちの草、なえたちの草を云ふ嫩草のことである。

「もゆる」は崩ゆるで芽を出す、めぐむ、きざす等の意。

「長閑けき」は空晴れて天氣うららかなること。日和のおだやかなことである。又ゆつたりしてあること、おちつきてしづかなること云ふ。

「あみ」は浴するといふ意で、は光を受けること。「やすらひ」は休息のこと。

「つくくし」は土筆のことで杉菜の地下莖から生する子囊群の稱である。其の形筆に似て節がある。食用とすることが出来る。

練習

(口) 豫備音程 (本譜視唱法)

春の野 新編教育唱歌集

J=100
mp

一、ナ タ ネー ノー ハ ナ ニー ト フ コ チョー
二、わ か くー さー も ゆ るー な か の う へー

ア ナ ソー ラー タ カ クー ナ ク ヒ バ リー
の ん げー きー ひ か げー あ み な が らー

イ ー ズ レ カ ハ ラ ヌ タ ノ シ サ ナー
や す ら ひ な れ ばー そ よ そ よ さー

ウ タ フー カー ハ ル ノー ノ ニ イ デ テー
そ で ふー くー か ぜ のー こ ゝ ろ よ さー

連絡及目的

ト調練習曲
季節的題材

復歌曲

教授上ノ注意

- (1) ト調四分ノ四拍子ノ歌曲ナリ
- (2) 附點四分音符ト附點八分音符トノ音長ヲ正確ナラシムベシ
- (3) (なたねの)ノ附點ヲ正確ナラシムルコト肝要ナリ
- (4) タイノ附キタル所ハ 如ノク唱フベシ
- (5) 吸氣ヲ多クシ中聲ヲ用ヒテ流暢ニ唱ハシムベシ

基本練習

(1) 發聲練習, (2) 音階練習(ハ調、ニ調、嬰ニ調、ホ調)
 (3) 音程練習 (イ) 本譜指唱法前學期ノ復習
 (ロ) 本譜視唱法ニヨリテ次ノ練習ヲ課ス

花 火 新編 教育唱歌集

♩ = 132

1. アレ アレ アガル ハーナ ビ
 2. あれ あれ みよや はなび

アレ ヒラケ テ
 あれ う く し

ハナ カホ シカ ソラ テーラ
 たのしう れし そらに もえ

ス アレ アレ アレ
 め あれ あれ あれ

アレ ミヅ テ テーラ ス
 あれ そらに きえ め

一、花 火

一、あれ、あれ、あがる花火。

あれ開けて、あれ花か。星か。空を照す。

あれ、あれ、あれ、あれ、水を照す。

二、あれ、あれ、見よや、花火。

あれ、美し。あれ樂し。うれし。空に燃えぬ

あれ、あれ、あれ、あれ、空に消えぬ

第一節は花火の發して
 照らし水を照らせる様
 第二節は花火の有様に
 燃ゆると見るまに空
 のである。
 花火とは種々の火薬を
 なごに装填し、火を點
 々の光又は形を現はさ
 東京の兩國の川開きの
 ものである。これは川
 すのである。

連授ノ目

審美的感情ノ養成

一、花 火

あれ、あれ、あがる花火。

あれ開けて、あれ花か。星か。空を照す。

あれ、あれ、あれ、あれ、水を照す。

あれ、あれ、見よや、花火。

あれ、美し。あれ楽し。うれし。空に燃えぬ

あれ、あれ、あれ、あれ、空に消えぬ

第一節は花火の發して花となり星となりて空を照らし水を照らせる様を歌つたものである。
第二節は花火の有様の如何にも美しく楽しく空に燃ゆる姿見るまに空に消えたことを歌つたものである。

花火とは種々の火薬を調合して、張筒又は竹管などに装填し、火を點じて高く空中に放ち、種々の光又は形を現はさしむるもの。

東京の兩國の川開きの煙火は實に美しい壯なるものである。これは川の夕涼の開始のまきになるのである。



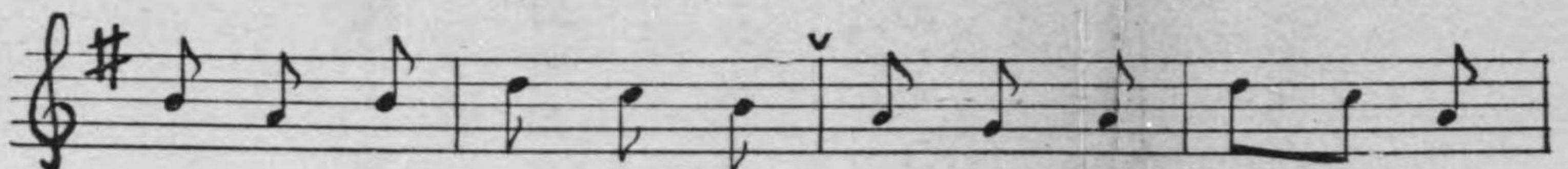
花 火 新編 教育唱歌集



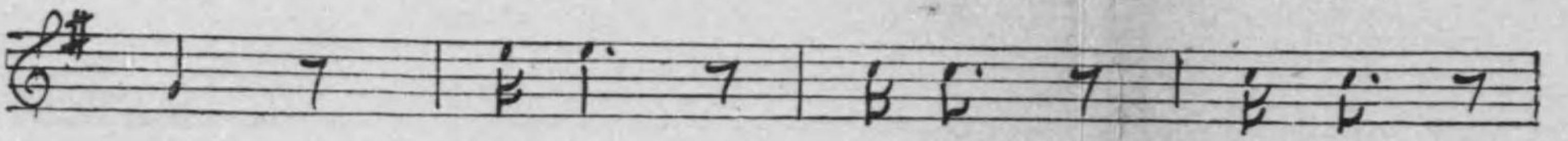
1. アレ アレ アガル ハー ナ ビ
2. あれ あれ みよや はー な び



アレ ヒ ラ ケ テ
あれ う く し



ハ ナ カ ホ シ カ ソ ラ チ テー ラ
た の し う れ し そ ら に も え



ス ア レ ア レ ア レ
ぬ あ れ あ れ あ れ



ア レ ミ ヅ チ テー ラ ス
あれ そ ら に きー え ぬ

審美的感情ノ養成
兒童ノ日常生活

廣瀬中佐

- (1) (♪♪)ハ(♪♪)ノサカサマニナリタルモノナレバ始メノ十六分音符ヲ極メテ短クシ次ノ附點八分音符ヲ長ク唱ハシムベシ
(2) (あれあれあれあれみづをてらす)ノ處ハ強聲ヨリ段々ト弱聲ニ移リ四回目ノ(あれ)ハ聞エカヌル位ナラシムベシ(みづをてらす)ノ處ハ普通ノ唱ヒ方トナスベシ

練習

連綴及目的

復習

教授上注意

第三章 基本練習の實際方案

基本練習の中には

呼吸練習。

發聲練習。

口形及發音練習。

音階練習。

音程練習。

發想練習。

聽音練習。

の七種類が含まれてをる。以下各項につきて卑見を述べよう。

2. あれ あれ みよや はー

アレ ヒラケ テ
あれ う く し
ハ ナ カ ホ シ カ ソ ラ ナ
た の し う れ し そ ら に
ス ア レ ア レ
め あ れ あ れ
ア レ ミ ツ テ テー ラ
あれ そ ら に きー え

連授ノ目的	審美的感情ノ養成 兒童ノ日常生活
復習曲	廣瀬中佐
教授上注意	(1) (♪♪)ハ(♪♪)ノサカサマニナリタルモノナレメテ短クシ次ノ附點八分音符ヲ長ク唱ハシムベシ (2) (あれあれあれあれみづをてらす)ノ處ハ強聲ヨリ段(あれ)ハ聞エカスル位ナラシムベシ(みづをてらす)スベシ

第一節 呼吸練習

四六

呼吸練習は一名氣息練習とも云ひ、呼吸の作用を整理し、肺の運動を盛にし、以て發聲の基礎を作らんとするものである。

呼吸は發聲上多大の關係を有するばかりでなく、身体的陶冶の効果も大なるものであるから、唱歌者の深き注意を要すべきことである。

呼吸練習は

イ、塵埃の飛散する處、空氣不良の場所、惡息ある處、寒氣強き時等に行へば、却つて害を爲すものである。

ロ、天氣晴朗の時必ず窓を開放し、尋常科四年までは胸式呼吸により、同五六學年に於ては腹式呼吸によりて、十分に吸

入し、十分に呼出すべきである。

ハ、吸氣は鼻腔よりすべく、呼氣は口よりすべきものである。

ニ、其種類には急吸緩呼、緩吸緩呼の二種類があるが、小學校に於ては、緩吸緩呼を本体とするが宜しい。

ホ、吸氣の際噪音のともなはざる様に、注意すべきである。

ヘ、呼氣の際母音にて發聲し、又は一二三四と拍子をよばしむる等も、面白き方法である。

以上各項の注意は、勿論肝要なる事柄なれど、呼吸練習の目的は、之れを發聲及唱歌に應用することに存するのであるから、唱歌の際常に呼吸練習の心持を忘れてはならぬ。

尙呼吸練習は、授業時間毎に必ずせねばならぬわけのものでは無い。幼學年にては特別の練習を要すれども、學年の進むに従

四七

ひて、發聲練習と同時に進行しても差支はなからう。

第二節 發聲練習

發聲は唱歌の基本となるものなれば、若其の練習の不十分なる時には、遂には唱歌科の價値を没却するばかりでなく、唱歌の爲めに大切な兒童の發聲機關を害ふに至ることがある。(教授要旨の章ストーク教授の批評参照)それ故に毎教授時間の初めに、其の練習を爲し、やがては之れを唱歌に應用し、聲音の美化につとめなくてはならぬ。

發聲を美しくする爲め、最も大切なるは換聲法である。

換 聲 法

人聲は其の使ひ方により、胸聲(地聲)中聲(上聲)及頭聲(裏聲)の三區

域に分つことが出来る。

胸聲(Chest Voice)男聲の大部分、女子及兒童の低音を發する時に用ふる聲で、此の聲を發する時には胸部の振動をおぼゆるものである。

中聲(Middle Voice)男子の普通の音、女子及兒童の中音を發する時に用ふる聲にして、氣息を上齒の方に向けて發聲し、恰も口腔又は咽喉の振動するが如き感を覺ゆるものである。

頭聲(Head Voice)俗に云ふ裏聲或は「カン」の聲で、氣息を上顎の前部に向けて發聲し、其の振動が恰も頭部にあるが如き感をおぼゆるものである(發聲に關しては草川氏唱歌法と發聲法を参照せらるべし)

高音を發する時に胸聲を用ふることは、唱歌者の最も禁すべ

き所である。尙胸聲より中聲に移る時、或は中聲より頭聲に移る時には、巧に之れを連結し、温雅婉美に發聲せねばならぬ。換聲の區域を譜表上に排記すれば、次のやうである。

五〇

男聲 胸 聲 中 聲

女聲 胸 聲 中 聲 頭 聲

東京女子高等師範學校附屬校兒童につき調べたる換聲區域

(男兒)

胸 聲 中 聲

(女兒)

胸 聲 中 聲

草川氏の調査したる換聲區域

(甲) 自然の狀態に於ける兒童の換聲區域

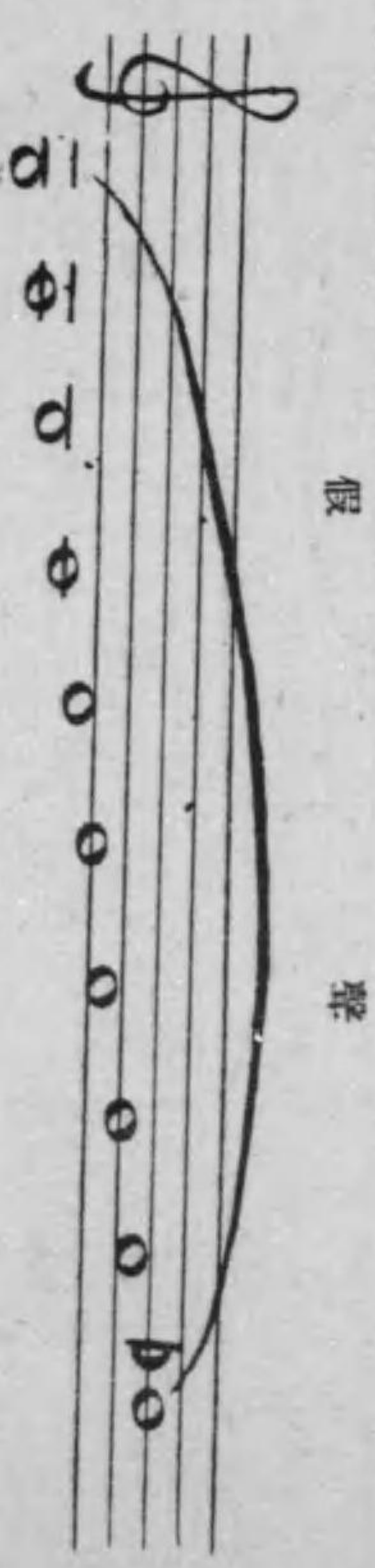
胸 聲 中 聲 頭 聲

五一

(乙) 唱歌練習時に於ける兒童の換聲區域



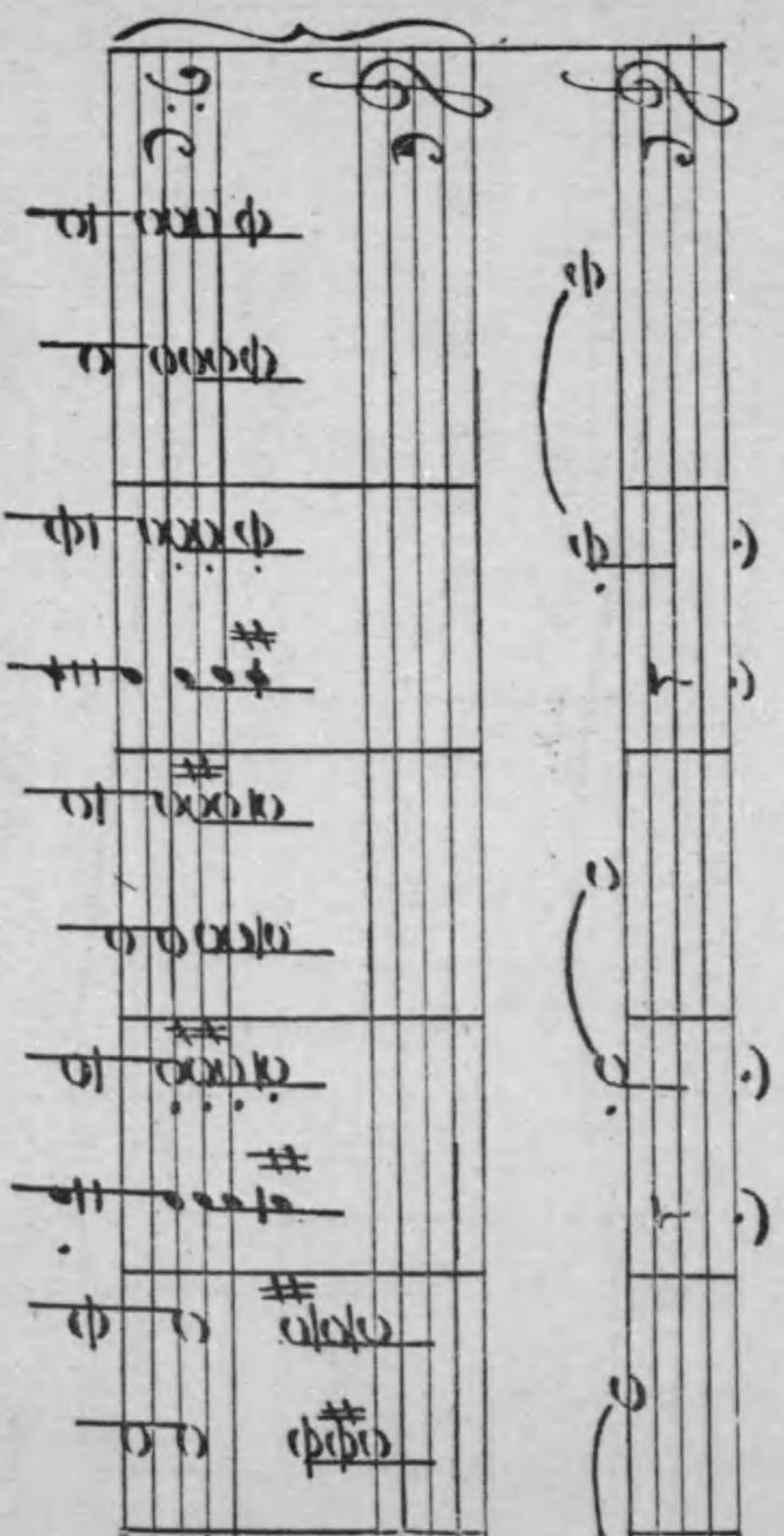
(丙) 變聲期兒童の換聲區域



兒童の聲が荒いとか、疲勞して調子が下るとか、喉が痛いとか、高音がでないとか、唱歌の際見苦しき顔形を爲すとか、

種々なる發聲上の缺陷は、大抵この換聲法の不十分から來るものである。

發聲練習の時に用ふる和音は次のやうである。



第三節 發音練習及口形練習

唱歌を聞いて歌詞がわからぬほど、不愉快なことはない。歌詞の不明瞭なのは、口形がうまく出来ぬからである。口形練習の中で最も大切なるは、「ア」音と「オ」音とである。

(イ音)



イ音は鉛筆の先端をくはへ得るだけに口を開き、同時に下顎を少しく前方に出し、舌の先端が下顎の前部にふるゝやうにすべきである。

(エ音)



エ音は子指をくはへ得るだけ下顎を下げ、それと同時に下顎を少しく前に突き出し、舌の前部を口の中央部に置くやうにすべきである。

(オ音)



オ音は唇を軽く集めて圓形となし、食指を入れるゝことを得るだけ歯を開き、舌の後部を口の中央に装置すべきである。右兩種の發音及口形が出来て後、他の母音に及ぶ様にした方が宜しいと思ふ。

(ア音)



ア音は上下兩齒の間に二指を入れ得るだけ口を開き、下顎を充分下げ舌は平かに保つべきである。

(ウ音)



ウ音は「オ音」よりも一層唇を集め、恰も塵埃を吹き飛ばすやうな口形を爲すべきである。

總て發聲の際には、鼻孔より氣息を漏らしてはならぬ。其の漏れるや否やを試ん

とせば、發聲と同時に指を以て鼻を摘み

て見るべし。直に不純なる響を感じて、容易に之れを悟ることが出来る。

發聲練習は始めは極めて弱聲にて唱はしめ、漸次音量を増加し、而かも常に音樂的の發聲たることを失はざるやうにし、再び次第に弱聲となし、おだやかに聲をおさむるやうに練習せねばならぬ。この發聲法は、やがて唱歌を唱ふ時に至りても、常に應用せらる

ゝもので、短き一音にても、其始と終とを弱く、中間を幾分強く唱はせるやうにせねばならぬ。又例へ強聲にて唱はしむる場合でも、其の始は弱聲に起り、速に強聲たらしむるやうに唱はせねばならぬ。且發聲の際には決して喉に力をいれてはいけない。文字を書く時、最も注意を要するは、筆の起と其の終とであるが如く、發聲もおこりとをさめとが最も大切であることを忘れてはならぬ。

第四節 音階練習

音階は音程の基本となるものであるから、其の巧拙はやがて唱歌の成績と、多大なる關係を有するものである。音階が樂器にたよることなく、正しく唱ひ得らるゝに到らば、三度四度位の音程は、自ら出来るやうになるものである。

音階に

五聲音階。

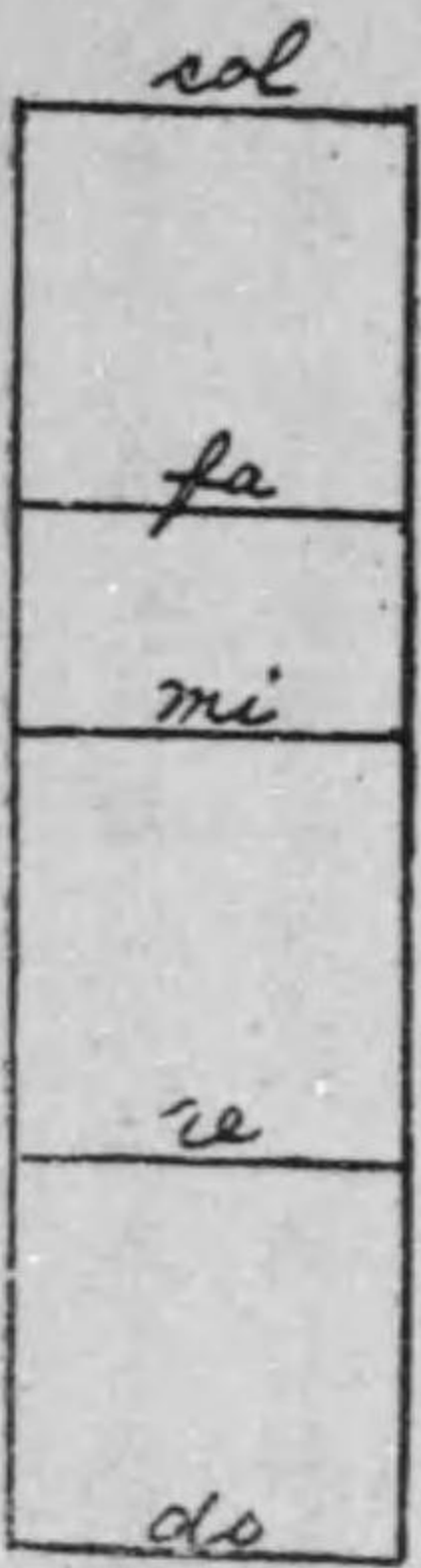
長音階。

短音階。

の三種類がある。

次に音階練習に關する注意を述べやう。

イ、五聲音階は尋常科一學年一二學期の頃に用ふべき音階であつて、長音階の第一音より第五音に至る、五種類の音につき、練習せしむるものである。

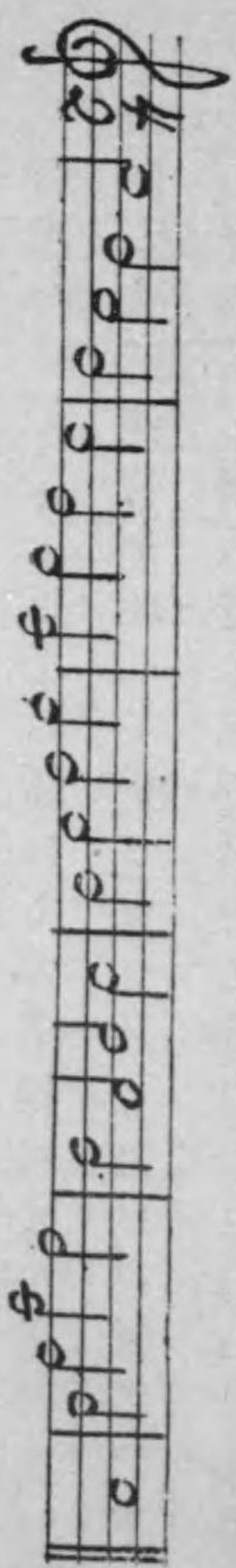


此間は階名にて唱はしむることなく、*f*及*o*音にて各音の高度を正確に唱はしめ、全音

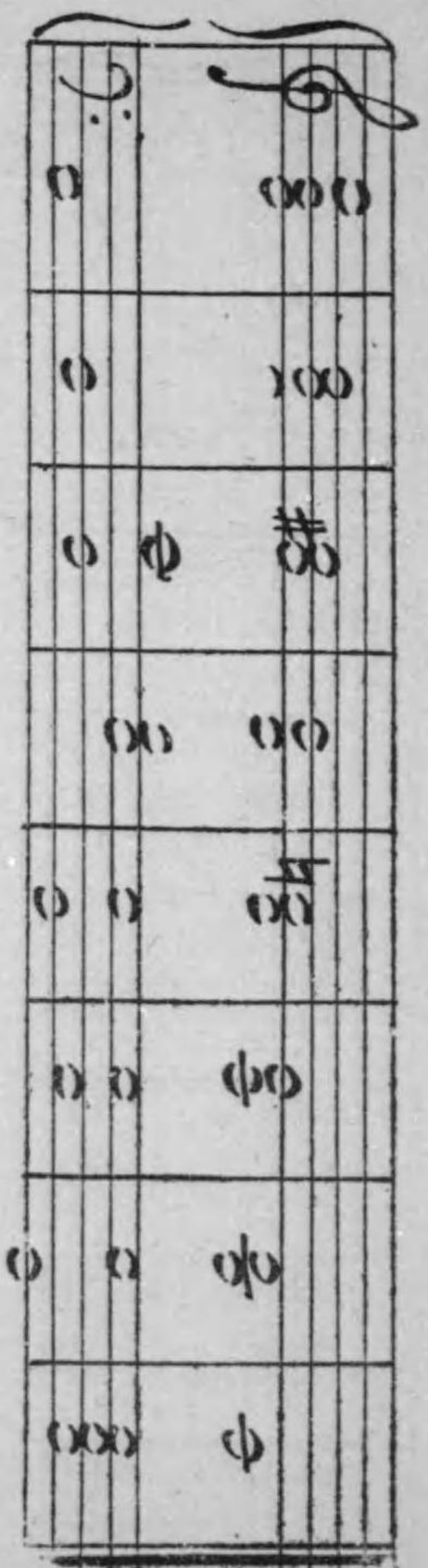
と半音とを正しく理解せしむる事を目的とする。この五聲音階が正確に唱へぬ間は、決して長音階の練習にかゝつてはならぬ。なせならば五聲音階すら正しく唱ひ得ざる間に、長音階の練習に移つたならば、音程の正確は決して望み得られぬからである。
ロ、一學年三學期の頃より母音を用ひて、長音階の練習を爲さしめ、同一學年より階名稱法によりて、長音階を唱はせるのである。此時期に至りても母音又は適當なる子音を用ひて、練習することを忘れてはならぬ。

ハ、尙現今にては上行より始むる音階練習ばかりにて、下行より始むる音階練習を課して居る處は殆ど無い。然るに下行より始むる音階は、第八音と第七音との間に含まるゝ半音程の練習上頗る有効なるばかりでなく、發聲練習上の効果も少くないもの

である。殊に頭聲の發聲を主とする尋常科に於ては下行音階を用ひて發聲の矯正を計らねばならない。



(一) 長音階に用ふる和聲は次のやうである。



(變二調)



Musical score for page 64, measures 1-8. Treble clef, key signature of two flats (B-flat, E-flat), common time. Bass clef, key signature of two flats (B-flat, E-flat), common time. The score consists of two staves with notes and rests.

(=調)

Musical score for page 64, measures 9-16. Treble clef, key signature of two sharps (F-sharp, C-sharp), common time. Bass clef, key signature of two sharps (F-sharp, C-sharp), common time. The score consists of two staves with notes and rests.

Musical score for page 65, measures 1-8. Treble clef, key signature of one sharp (F-sharp), common time. Bass clef, key signature of one sharp (F-sharp), common time. The score consists of two staves with notes and rests.

(變ホ調)

Musical score for page 65, measures 9-16. Treble clef, key signature of two flats (B-flat, E-flat), common time. Bass clef, key signature of two flats (B-flat, E-flat), common time. The score consists of two staves with notes and rests.

Musical notation for page 66, consisting of two staves. The top staff is in treble clef with a key signature of two sharps (F# and C#). The bottom staff is in bass clef with a key signature of two flats (Bb and Eb). The notation includes various note values and rests.

(ホ調)

Musical notation for page 66, consisting of two staves. The top staff is in treble clef with a key signature of two sharps (F# and C#). The bottom staff is in bass clef with a key signature of two sharps (F# and C#). The notation includes various note values and rests.

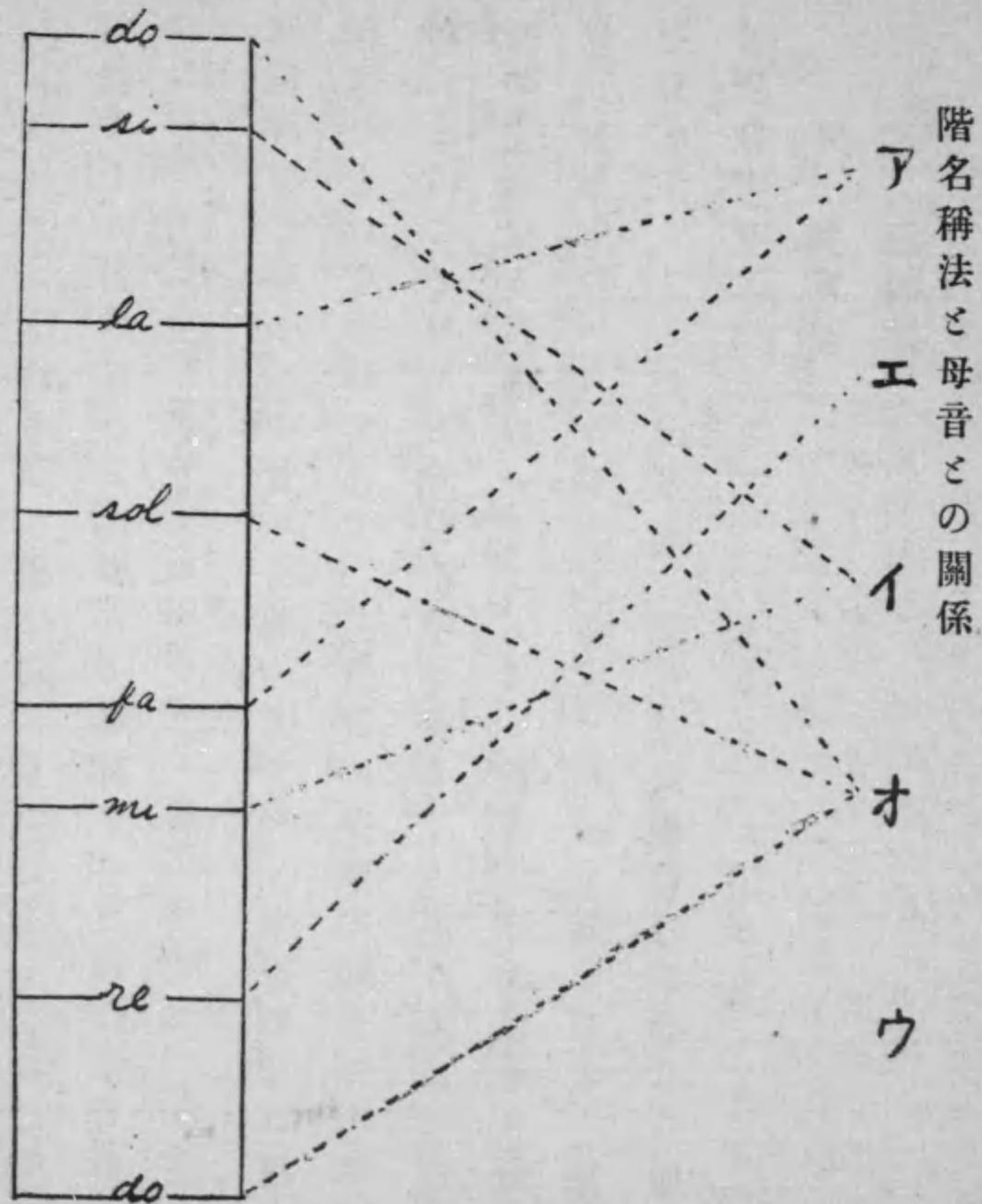
ニ、當日教授せんとする歌曲の調子によりて、音階練習を爲さしむることの、大そう必要なる旨を詳述した歐米の唱歌書を見たこともある。是れ亦よき方法であらう。

ホ、音階に拍子をつけて、唱はしむる方法もある。次に二三の例を挙げよう。

(四拍子)

Musical notation for page 67, consisting of two staves. The top staff is in treble clef with a key signature of two sharps (F# and C#). The bottom staff is in bass clef with a key signature of two sharps (F# and C#). The notation includes various note values and rests.

Musical notation for page 67, consisting of a single staff in treble clef with a key signature of two sharps (F# and C#). The notation includes various note values and rests.



以上各種類の音階を學年と兒童の力とに應じ、色々と變化をつけて、唱はしむることが大切である。

へ、階名稱法はやかて母音の發聲と相一致すること次の例の示すやうであるから、口形舌の位置姿勢容貌等、細末の點に至るまで正確に唱ふ習慣をつけておかねばならぬ。



(二拍子)



(六拍子)

ト、音階を唱ふ時にも強き聲を用ふることなく、おだやかにして無理なく、自然にして温雅なる發聲をさせねばならぬ。

第五節 音程練習

音程練習とは一つの音から他の音に至る距離の、高度的關係を練習せしむる方法である。二音間の距離の觀念が出来て、樂器にたよることなく、歌曲を唱ひ得るやうにすることは、唱歌教授の主要なる目的の一つである。然るに歌曲ばかり教へて居ては、音程を考へつゝ唱ふ兒童は、殆んど無いから、音程の實力を養成することが出来ぬ。是れ音程練習の必要なる所以である。音程練習を大別して二つにすることが出来る。

- (甲) 指唱法。
(乙) 視唱法。

左に右兩種類の音程練習につき卑見を述べやう。

第一項 指聲法 音階圖又は五線上に記載せる音符を指し示して、唱はしむる方法である。之れは尋常科三學年の頃より課することが出来る。兒童の力に應じてたやすくも六ヶ敷くも、随意に指唱せしむることが出来る。而かも音程と同時に發音練習、發聲練習をも兼ねることが出来て、頗る重寶な方法である。東京高等師範學校田村教諭、奈良女子高等師範學校幾尾教諭等、大に之れを利用されて居る。

其練習上の注意を挙げれば、次のやうである。本譜指唱法は尋常科三學年第一學期の頃より始め、最初は第一音より第三音に至る三種類の音につき、二度音程の練習をなし。

次には第四音を加へて半音の説明と唱ひ方の練習とを爲す。
次には第五音を加へ、第一音より第五音に至る五種類の音につき、二度音程を練習するのである。

次には *do mi so* の三和音を加へ、二度と三和音とによりて、成れる音程の練習を爲す。この練習は甚だ大切なるものにして、實に諸音程の基本となるべきものであるから、兒童が音程を理解しつゝ、やすく唱ひ得るに至るまで、根氣よく練習することが大切である。

次には第六音を加へ、次には第七音及第八音を加へ、第一音より第八音に至る八種類の音につき、二度音程の練習を爲す。次には *do re* を加へ、一音階中の二度音程と、三和音との練習を爲す。

以上の諸練習を三學年の終までに爲したいと思ふ。
今一度繰返して云つて置きたい。

指唱法は音程を正確に唱はしむるのが最も大切であるから、たとへ兒童が間違なしに階名を読み得ても、音程にあやしき所がある時には、實力は一向につくものではない。音程の正確てふことに、特に注意して練習することが肝要である。

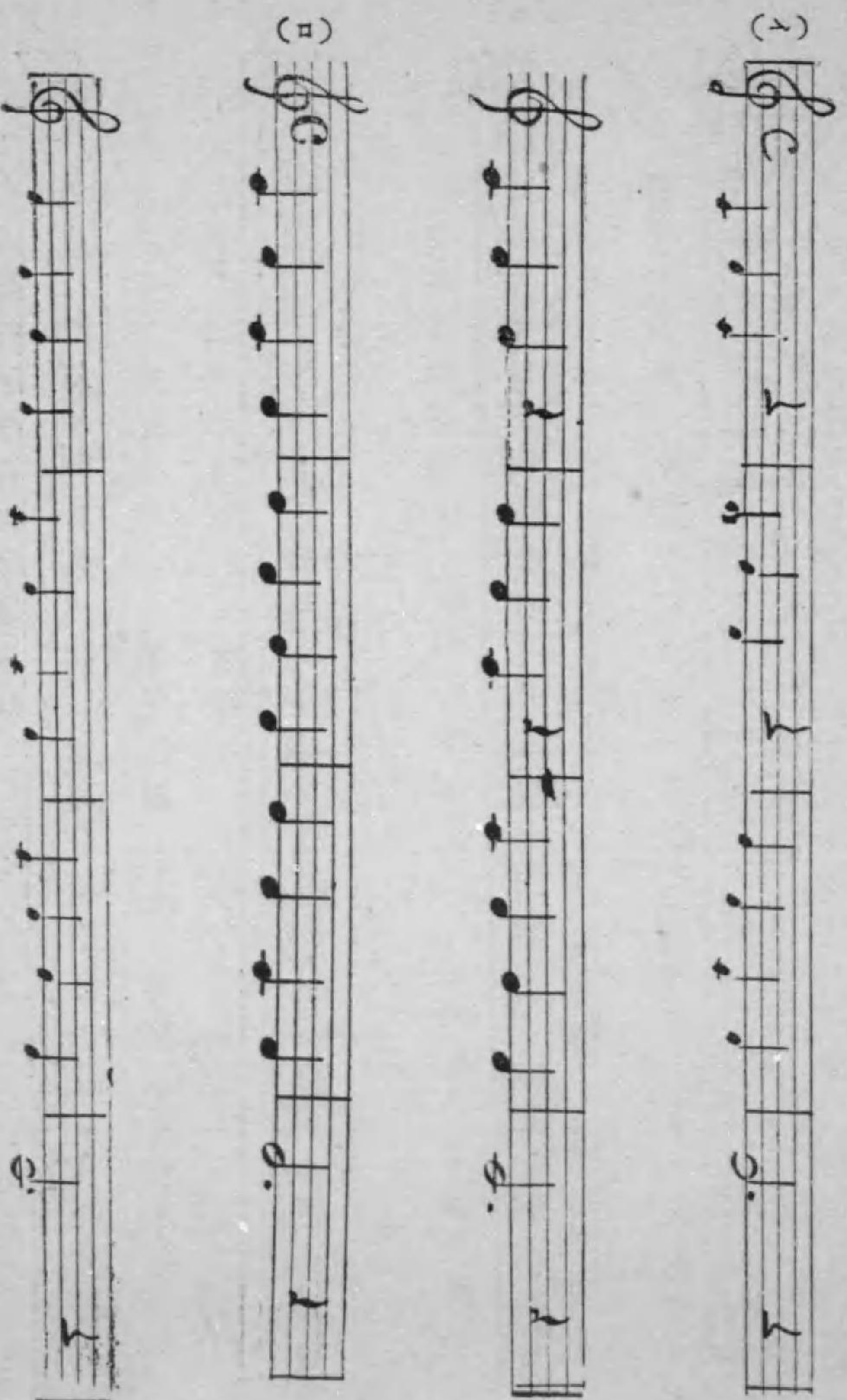
次には *do fa la do* の和絃を加へ、次には簡易なる三度音程に移るのである。斯くの如くにして五學年第一學期の終までに、三度を終り、六學年の終までに、四度を終りたいのである。尙音程を指唱せしむる時、始めの音程は次に唱はしむべき音程の豫備となり、二回目の音程は三回目の音程の豫備となるやう指示して、兒童は知らず識らずの間に、易より難に唱ひ

行く順序を取らねばならぬ。

最後に注意すべきことは、音程を指唱せしむる時には、常に
児童の音量を少くし、拍子を遅くし、適當なる變化をつけ、
吸氣の場所に注意して無理のなき様に唱はせねばならぬこと
である。教授者の音程が正確であらねばならぬことは、無論
である。

此の本譜指唱法は、讀譜の練習法として最良の方法であつて、
この指唱法が出来たならば、児童は容易に歌曲を唱ひ得るや
うになるものである。

参考の爲め、指唱法に用ふべき數種の音程を次に記載せう。





Four staves of musical notation. The first staff is a single line of music. The second, third, and fourth staves are grouped together with a circled '1' above them, indicating a first ending or first part of a variation.

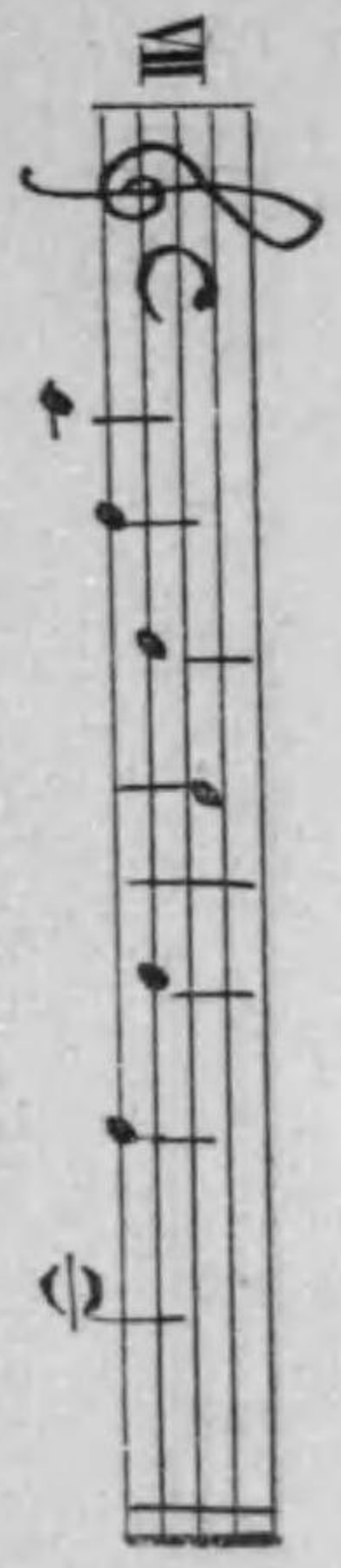
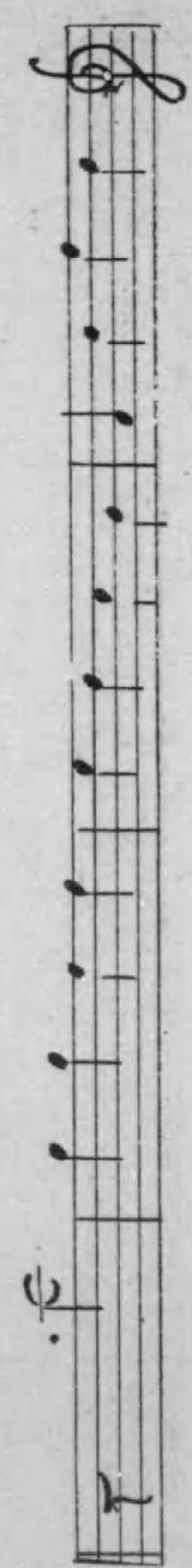
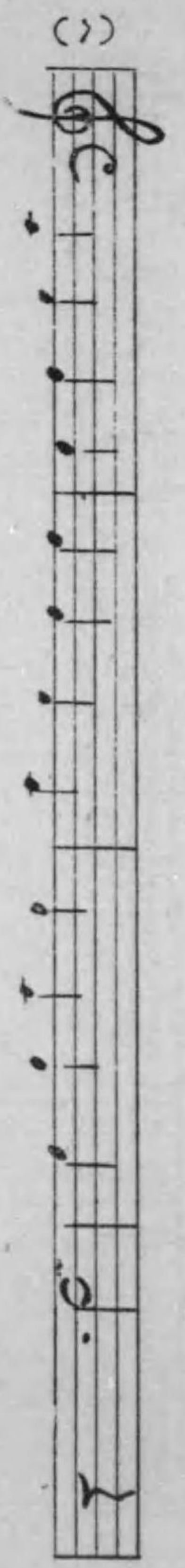
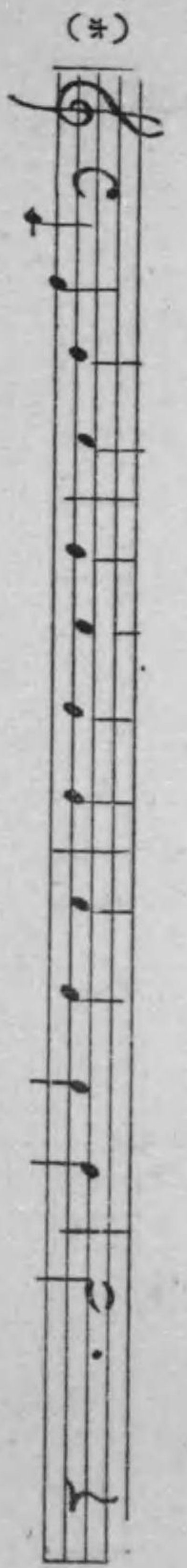
Four staves of musical notation. The first staff is a single line of music. The second, third, and fourth staves are grouped together with a circled '2' above them, indicating a second ending or second part of a variation.





Handwritten musical notation on page 84, featuring four staves with treble clefs and common time signatures. The notation includes various rhythmic values such as eighth and sixteenth notes, rests, and bar lines. The first staff begins with a circled '3' above the clef. The second staff begins with a circled 'VI' above the clef. The piece concludes with a double bar line.

Handwritten musical notation on page 85, featuring four staves with treble clefs and common time signatures. The notation includes various rhythmic values such as eighth and sixteenth notes, rests, and bar lines. The first staff begins with a circled '3' above the clef. The piece concludes with a double bar line.



Handwritten musical notation on page 88, featuring four staves with treble clefs and common time signatures. The notation includes various note values, rests, and bar lines. The first staff begins with a circled '1' above the first measure. The second staff begins with a circled '2' above the first measure. The third and fourth staves continue the musical sequence.

Handwritten musical notation on page 89, featuring four staves with treble clefs and common time signatures. The notation includes various note values, rests, and bar lines. The first staff begins with a circled '3' above the first measure. The second, third, and fourth staves continue the musical sequence.

(II)

第二項 視 唱 法

(I)

本譜にて簡易なる音程を書きて之れを唱はしめ、習熟したる後は樂器にたよることなく獨唱し得るやう、練習することが其目的である。

現今多くの小學校(特別に唱歌の上達せる學校は別として)にては、兒童は數多くの歌曲を學習して居るにも係らず、音程の

力は誠に貧弱にして、do re mi ♯ do mi sol. の區別すらも、出来兼ねるものが少くない。文部省令に「平易なる楽譜を唱ふことを得しめ」云々。とあるのは、平易なる楽譜ならば、自分の力にて唱ひ得るやうにせよ、との意であらう。

(イ) 豫備的音程練習

(ロ) 基本的音程練習

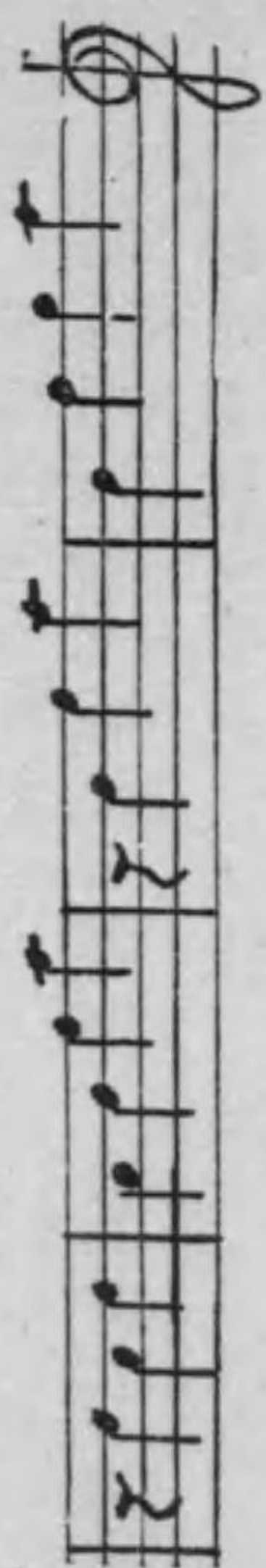
の二種類がある。

(イ) 豫備的音程練習とは、當日教授しようと思ふ歌曲中の難音程をぬきとり、其音程をたやすく歌はしめんが爲め、補助的音程を作り之れを練習せしめ、歌曲教授の豫備たらしめんとするものである。

次に一例を挙げよう。



の音程を教授せんとする場合



と練習せしむるのである。

(ロ) 基本的音程練習とは、二度音程三度音程と順序に従ひて之れを練習し、基本的實力を養成せんとするものである。この練

習も亦頗る必要な方法であるけれども、趣味少きを以て無味乾燥に流れやすく、遂には兒童をして唱歌科を忌ましむるに至る恐れがある。それ故に程度を考へ變化をつけ、趣味ある間に音程の練習を爲さしむる様にせねばならぬ。視唱法につき主なる注意事項を列擧すれば、大要次のやうである。

1. 尋常科三學年以下の學年にては、授業時間の四分の一を越えてはならぬ。
2. 同六學年に及びては、三分の一を越えてはならぬ。
3. 始めは極めて弱聲にて唱はしむべきこと。
4. 音程と拍子とを最正確に唱はせねばならぬこと。

第六節 發想練習

發想練習とは

1. 弱聲の練習。
2. 強聲の練習。
3. 弱聲より次第に強聲にいたる練習。
4. 強聲より次第に弱聲にいたる練習。
5. 右兩種類の發想を連続したる練習。
6. スタカット練習。

等各種類の發想上の練習を「ア」音或は「オ」音を用ひてなすものであつて、此練習に習熟する時は、歌曲を唱ふに方りても發想自由につきて、美しき唱歌の出来るものである。

第七節 聽音練習

聽音練習とは樂器にて簡易なる音程を彈き、其階名若くは拍子を聽きわけさせる方法である。

聽音練習は正確なる聽力を養成せんが爲に行ふものである。聽力の不完全な人には、美しき唱歌は決して出来るものではない。總て基本練習は無味乾燥に流れ易きものであるから、各種の工夫をこらし變化をつけ、兒童をして嫌厭の情を起さしめざる様につとめ、而かも形式に流れず徹底的に教授して行くところが、最も大切である。

第四章 樂譜教授の時期及方法

兒童の自發的活動を尊重せよ、自學自習を獎勵せよ、とは近頃教育の根底をなして居るといつてもよい位である。然るに獨唱歌科のみ一學年の始より六學年の終に至るまで、全然模倣ばかりで推理も應用も無く、そして教師は教授上の主義方針なく、徒に其の時間を過して居る、と云ふやうなことがあつたとしたならば、それは餘りに非教育的ではなからうか。兒童の能力相當に、自分で考へて唱はせる、と云ふ方法をとりたうと思ふ。

その方法としては視唱法を措いて、他に待つべきものは無い。視唱法の内に略譜視唱法と本譜視唱法との二種類がある。次に兩者の長短につき比較してみやう。

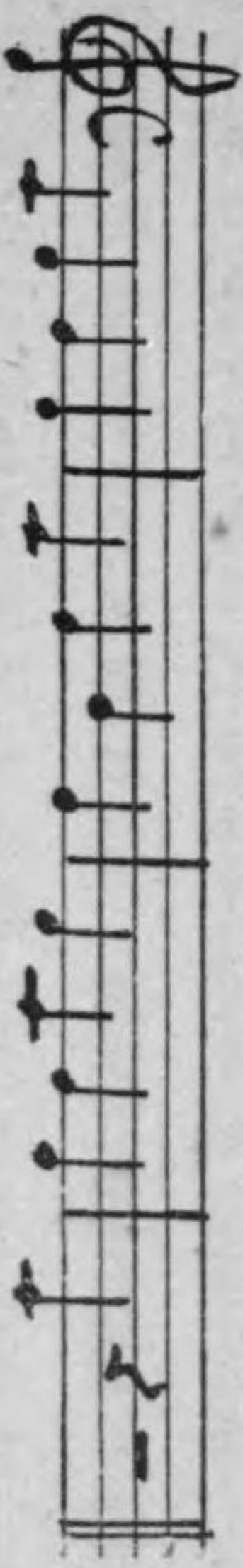
略 譜	
長 所	<p>(一) 數字の觀念と聯絡して歌ひ得らるゝから唱ひ易い。</p> <p>(二) 同上の理によりて音の高低を知り易い。</p> <p>(三) 調子が變つても樂譜に變化がないから唱ひ易い。</p>
短 所	<p>(一) 數の大小によりて關係的高度を示すに止り、絶對的高度を直覺することが出来ぬ。</p> <p>(二) 複雑な樂譜は明瞭正確に表示することが出来ぬ。</p> <p>(三) 間に合せの樂譜である。</p> <p>(四) 樂器使用上の便利が悪い。</p>

本 譜	
長 所	<p>(一) 音の高度を直覺的に示すことが出来る。</p> <p>(二) 萬國共通の最も整頓した樂譜である。</p> <p>(三) 複雑なる樂曲をも明瞭正確に記載することが出来る。</p> <p>(四) 樂器使用上最も便利な樂譜である。</p>
短 所	<p>(一) 組織が複雑であるからまぎらはしい。</p> <p>(二) 階名が讀みにくい。</p> <p>(三) 調子の變る毎に主調音の位置が變るから唱へにくい。</p>

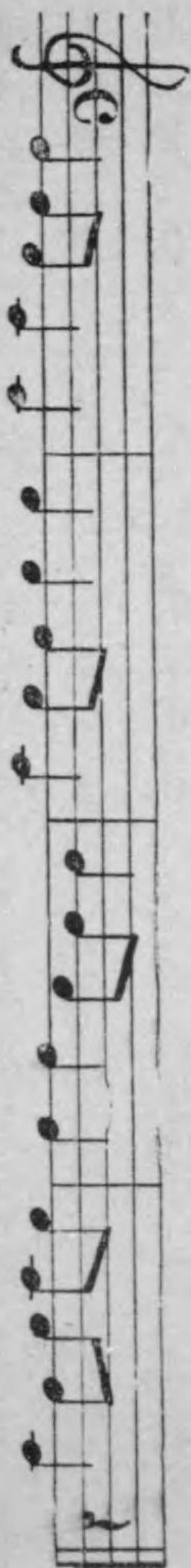
大要右の様なこととなるが、つゞまる所略譜より本譜の方が明瞭正確に出来て居るから、成るべくならば本譜を採用したいけれども、何分面倒で困ると云ふ結論となるのであろう。嘗つて私は、本譜が兒童にとりてどれ位困難なるかを試るため、四月上旬から尋常科三學年の唱歌を受持ち、毎回試験的の授業を繼續して見たことがあつた。此の學級は三學年中にて最も年齢の若き數へ年七歳の時に入學した兒童が八割餘で二割弱は八歳にて入學した兒童を集めた組であつた。

此の時私は氣息練習口形練習及發聲練習を終りて、階名と母音との關係を説明したる後、長音階を唱はせることが出来た。次ぎに本譜指唱法によりて、第一音より第五音までの二度音程と三和音との練習をなし、五月十日までに三十分宛の授業十回にて長音階中の二度

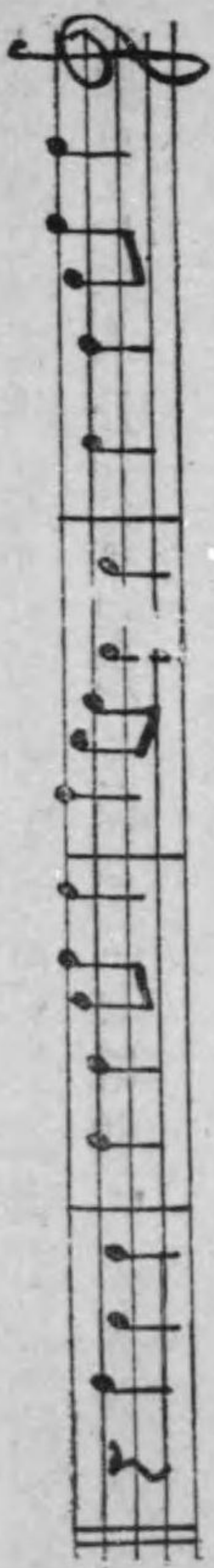
音程及三和音によりて成れる音程ならば、級中の約三割位の兒童は唱ひ得るやうになつた。十一回目の授業には四分音符の形と長さとを教へた後



この音程を板書し範唱もせず樂器も用ひずして一人づゝ唱はせたが、大部分の兒童は唱ひ得たので、非常なる愉快を感じた。十二回目には八分音符の形と長さとを説明したる後、



を唱はしめ、
十三回目には、



を唱はせた。

十四回目には右二樂節を連続して練習した後、歌詞「見わたせば」をつけて唱はせることが出来た。無論反覆記號の説明も與へた。

此の間各授業時間には發聲及音階の練習も爲し、「輝く光」を聽唱法によりて教へ、五月二十四日までに第一及第二の歌詞を暗誦し得るやうにすることが出来た。

授業時間の中途又は終に於て、色々と變つた歌や兒童既習の歌曲を、

唱つて聞かせたこともある。兒童に神武天皇の御話をさせたことも、教壇上に立たしめて獨唱させ、他の兒童は拍手喝采して歓迎したことも度々あつた。兒童につきて唱歌は苦しくはないか、六ヶ敷くはないか、と尋ねると、大層面白い。唱歌の時間が一番待たると云つて居た。本譜がいやだとか、指唱法が面白く無いとか、云つた兒童はまだ一人もなく、そして一日一日と讀譜の趣味が出る様に思はれた。

以上の實驗により、尋常科三學年の兒童が相當の趣味を以て、本譜を唱ひ得るものである、新しき樂譜を見ては、自分の力で歌つて見たい、と努力する。そして幾部分にても歌ひ得たことを、非常に喜ぶものである、と云ふことが確められた。此の状態にて進まば、五學年の中頃にも至らば、普通の歌曲は兒童自身にて、唱ひ得るやう

になるであらう、と思はれた。かくなりてこそ唱歌に對する趣味も
 深くなり、技能もめき／＼上達し、所謂自學自習の本旨にもかなひ、
 初めて唱歌科が他の教科目と相對立して、行けるやうになることゝ
 思ふ。かゝる意味よりして、次の教程の實行を御進めしたのであ
 る。

學年	基本練習	歌曲
一學年	(1) 氣息練習。 (2) 口形練習及發音練習。 (3) 發聲練習。 (4) 五聲音階。	聽唱法。 第二學期より歌詞を板書して唱はしめる。

學年	二學年	三學年
基本練習	(1) 氣息練習。 (2) 發聲練習。 (3) 長音階。 (4) 簡易なる二度音程。	(1) 氣息練習。 (2) 發聲練習。 (3) 音階練習。
歌曲	聽唱法。 歌詞を板書し色々なしるしをつけて唱はしむる。	聽唱法。 歌詞を板書して唱へしめる。

年 學
<p>(5) 音程練習。(三度音程)</p> <p>(イ) 音階圖指唱法と本譜視唱法とを混用する。</p> <p>(ロ) 本譜視唱法によりて音の高低及長短の觀念を養成し、五學年の準備をする。</p> <p>(6) 樂典要項。</p>

四	學 年	年 學
<p>(1) 氣息練習。</p> <p>(2) 發聲練習。</p> <p>(3) 發想練習。</p> <p>(4) 音階練習。</p>	基 本 練 習	<p>(4) 音程練習。</p> <p>一學期は音階圖指唱法。</p> <p>二學期より本譜指唱法を本体とする。</p> <p>(5) 聽音練習。</p>
<p>第一學期は聽唱法。</p> <p>第二學期より本譜視唱法によりて簡易なる歌曲を教授する。</p>	歌 曲	<p>歌詞の横或は下に拍子の記號をつけて歌はしむることもある。</p>

學 年	六 學 年
基 本 練 習	(1) 發聲練習。 (2) 音階練習。 (イ) 長音階。 (ロ) 短音階。 (3) 音程練習。 本譜視唱法及本譜指唱 法によりて基本的音程 及豫備音程の練習。 (4) 聽音練習。
歌 曲	本譜視唱法。 各種の調子にて。

學 年	五 學 年
基 本 練 習	(1) 發聲練習と氣息練習を 兼ね行ふこともある。 (2) 發想練習。 (3) 音階練習。 (4) 音程練習。 (イ) 本譜視唱法。 (ロ) 豫備音程。 (5) 聽音練習。 (6) 樂典要項。
歌 曲	本譜視唱法。 ト調。 ハ調。 ニ調。

先年獨乙に於て第四回音樂教育會が開かれた際にも、この問題が提出され、其結果學校に於ては絶対に數字譜を廢し、徹頭徹尾本譜のみを使用することを、其筋に建議することを決議した、このことである。

そして現今にても、エストフレンやライン河沿岸の普魯西屬領地や、南獨乙の片田舎を除きたる他は、數字譜を用ふるものなく、全部本譜視唱法によりて教へて居る、この事である。

第五章 唱歌科教授法

唱歌の成績を良好ならしめんが爲には、唱歌の四大要項たる發聲、調子、拍子及曲想につき、細末なる點にいたるまで丁寧に批正し、樂曲に習熟するに至らば興味自ら生じ、技術方面より觀ても、精神方面より觀ても、立派な唱歌となり、歌ふ人も聽く人も、無我の状態に至らねばならぬことは、唱歌科教授要旨の章に於て説明した通りである。然しこのことは、云ふに易くして行ふに至難なることなれば、何人も知りつゝも實行の出來かぬ所であるから、一面に於ては基本練習によりて兒童の實力を養成し、一面に於ては發聲機關と精神との過勞に陥らざるやうに注意しつゝ技能の進歩を計り、尙興味を失はざるやう、或は愛情ある拍節法により、或は輕快なる伴

奏により、或は適當なる賞賛の言葉により、合唱により獨唱により、又は教師の範唱によりて、時の移るも知らず教授時間を過すと云ふ様に機轉をきかせて教授をせねばならぬことは勿論であるが、それにも増して大切なることは教師の實力と、いつも變らぬ溫容と、熱心と同情とを以て兒童に臨まねばならぬことである。

兒童は眞面目に唱つて居ても、教授者の思ふやうには進歩し兼ねることがある。樂譜教授の如きも、教授者が希望するほど速かには實力のつくものではない。それ故教授が思ふやうに行かないからとも決して兒童を責めてはならぬ、叱つてはならぬ。其全責任は教授者自身に存するものなることを反省せねばならぬ。教授の方法に隙は無きか無理はなきか、愛の無き教授を爲したるにはあらざるか、それとも教材が難に過ぎたるにはあらざるか、音域は如何、音程は如

何、兒童疲勞の程度は如何、教授者自身の精神状態は如何。と反省する時には、教授の不出來なる原因は、必ず教授者に存することを知らることが出来るものである。

(教授者が他に心配ごとのあるとか、病氣の爲め氣まづかつたりするど、それが直ちに兒童に影響し兒童は教師と同様の精神状態になるものである。)

教授の順序方法の如きは比較的小さき問題である。

私は音階を唱ふ時には、第三音と第七音とは比較的強く唱はせねばならぬものと深く信じて居た。この考を以て兒童を教授して居る時、歌曲や音程は奇麗に唱ひ得る割合に、音階を奇麗に唱はぬので、音階練習の度毎に不愉快な感を起し、兒童に小言を云つた事も幾度となくあつた。されど遂に氣持よき音階を唱はせることが出來ないの

で、この苦心を友人に話した。友人は第三音と第七音とを比較的弱く唱はせたならば、奇麗に唱へるのであらうと云つた。私はその翌日から、其の教に従ひて唱はせると無理のなき奇麗な唱ひ方となつたので、衷心より感謝の意を表すると共に罪も無き兒童に小言を云つたことを恥ぢたことがあつた。

参考の爲め左に唱歌科教案の一例を掲載しよう。

唱歌科教案

訓導 姓 名

大正十二年 月 日 (曜午前 時 分ヨリ 時マデ)

學年 尋常科五學年男

教授ノ目的 日本刀ノ樂譜及第一歌詞を教授シ、歌曲ニ習熟セシム

ルト共ニ、剛健、勇武ノ氣象ヲ養成セントス。

音程練習曲

基本音程



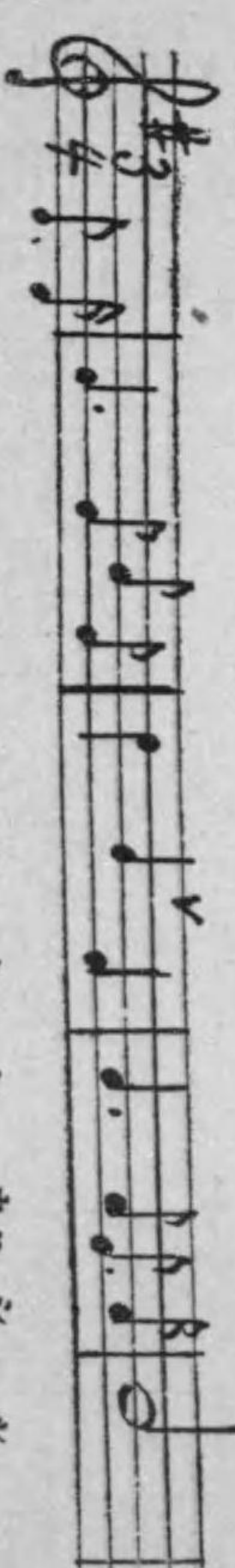
準備音程



♩ = 116
mf

日本刀

唱歌教科書



ウレタマシモアリタレカハシ
ル
一一五

ヲ、レ、ニ、カ、カ、ラ、ア、リ、ヨ、ニ、カ、ガ、ヤ、ク

ミ、ガ、キ、ニ、ミ、ガ、ク、ル、キ、ヤ、ム、ダ、ム、シ、ロ

キ、ダ、ン、ニ、キ、ダ、ン、ク、ニ、キ、ー、ク、ダ、ク

教授ノ順序

- 一、發聲練習
ア音及オ音ヲ用ヒ(ハ)ヨリ(ニ)ニ至ル間ノ數音ニツキテ發聲ノ練習ヲナス。
- 二、音階練習
ハ、變ニ、變ホ調長音階。
- 三、音程練習
本譜視唱法ニヨリテ基本的音程及豫備的音程ノ練習ヲナス。
- 四、目的指示
- 五、歌曲提示
- 六、樂典上ノ問答。調子、拍子、呼節法、アクセント、タイ、發想記號、歌曲ト豫備音程上ノ關係。
- 七、齊唱
生徒全体ニテ、階名ニヨリ樂器ヲ用フル事無ク合唱セシム。
- 八、範唱
歌詞及階名ニテ一二回。

- 九、課 唱 始メハ樂器ト共ニ極メテ弱聲ニテ唱ハシメ、稍習熟シタル後、普通ノ音量ト普通ノ速度トス。
- 一〇、歌詞ノ讀方及意義（此ノ時歌詞ヲ記載シタル小黑板ヲ用フ）
- 一一、歌詞ニテ範唱
- 一二、同課 唱
- 一三、復 習 行又ハ列ニ分チテ合唱セシメ、發聲曲想等ニツキテ批正ヲナス。歌曲ニ習熟シタル時ハ、拍節法ニヨリテ合唱セシメ、又數人ノ兒童ヲシテ獨唱セシム。
- 一四、既習 曲 富士山ノ復習ヲナス。數人ノ兒童ヲ教壇上ニ立タシメテ獨唱セシム。
最後ニ再ビ全級兒童ヲシテ合唱セシム。
- 一五、聽音練習 時間ニ餘裕アル時ハ、簡易ナル音程ヲ彈キ其階名ヲ聽キトラシム。

第六章 唱歌教室の管理及訓練につきて

唱歌教室は、常に和氣霽々たるものがあつて、四時春の如き氣持でなくてはならぬ。教室を裝飾するも、清潔にするも皆同じ精神から出たものである。それ故に唱歌教室に於ては、先生が恐いから靜蕭にして居る、と云つた様な管理の仕方は誠に好ましくない、閻魔の前に呼び出されて長閑な聲を出して獨唱し得る人があらうか、こわき教師の前にて心から和らぎある唱歌の出來やう筈は無い。さりながら唱歌の時間は他の學科の時間よりも一層騒がしくて困ると云ふやうなことがあつてはならぬ。

「唱歌教室に入ると兒童はいつに無く騒いで困る、之れは如何なる理由であるか」との質問を受けたことが度々ある。其度毎に「それは先生

が悪いからだ。」と。卒直に答へるのを常として居る。児童は頭の天邊より足の爪先に到るまで生氣に満たされて居るから、其生氣はやがて活動にあらはれて、運動となり、遊戯となり、讀書となり、習字となり、唱歌となるものである。それ故に唱歌の時間に於ては、教授者は児童の生氣を巧みに利用することを一番に考へねばならぬ。然し生氣を利用すると云ふことは一時間ぶつ通しに唱はせよと云ふ意味では無い、纖弱なる児童の聲帯は、疲勞の早いものであると云ふことを忘れてはならぬ。さりながら折角児童が本氣で唱ひかけると先生の樂器が間違つて、幾回もくく唱ひ直すやうでは、正直な児童の騒ぎ出すのも無理も無いことであらう。活動性に満たされたる児童も、教師の監視あるが爲めに靜肅なることは何れの學科とても同一である。

それにつけて誠に面白い話がある。或先生が黒板に向つて長い間文字を記載して居た。そうすると児童はソロ／＼惡戯を始め出した、其時先生は黒板に向ひたる儘にて、惡戯児童の姓名とそれが爲せる惡戯の仕方を云ひて警戒を與へた。これを聞きて全級の児童は其意外なるに驚き、互に顔を見合せ此の先生は前を見ると同時に後も見える目を以て居るから決して惡戯は出来ぬと云ひ、其後は非常に靜肅になつたと云ふことである。(實は此の先生は眼鏡を掛けて居たので、児童の惡戯が其の眼鏡の片隅に映つたのである。)

児童は教師の監視をはなれては靜かにして居ることの出来ない性質を持つて居るのに、オルガンの鍵板ばかり見て居て児童に注意する餘裕の無き先生が幾多あるのでは無かろうか、然も三度の内二度までもオルガンを演き違へて。

唱歌は趣味の學科である、趣味あるが爲めに兒童は静かである、時の移るも知らないで過すものである。然るに先生の唱歌と樂器とがあまり上手で無かつたならば、本學科の第一條件を没却して仕舞ふ。それでも静かであらねばならぬと云はるゝ兒童こそ誠に同情に値するものがあると思ふ。

一週一度しか無い大切な唱歌の時間の六七分も、歌詞の説明にとられ、唱歌の授業やら國語の時間やらわかり兼ねる授業を受ける兒童も可愛相なものだと思ふ。

言はずもがなの御小言の長文句を並べらるゝのも苦しき極みである。書き列ぬればまだ色々あるが要するに兒童の騒ぐ原因は教授者自身に存するので兒童には決して罪は無いものであると云ふことを確く自覺し自ら反省してもらひたいのである。

唱歌教室の管理は唱歌それ自身が面白くて身の疲るゝも時の移るも知らず最も愉快に學習すると云ふ有様でなくてはならない。無我の状態となり全く歌中の人となりて唱歌する時に於て、始めて美感の養成にも感情の教育にも身体的の陶冶にもなるものである。

(唱歌教授要旨参照)

第七章 唱歌教授の缺陷及其救済方案

一、吸氣の量を多くし、唱歌の際に用ふる呼氣を少くすべきこと。
 兒童の唱歌は吸氣少く、發聲と同時に進行する、呼氣多きに過ぐる爲め、發聲荒く不調和となり、息苦しくして、のんびりとした心地よき唱歌の、出來ざるに至るものである。呼吸練習はやがて之を唱歌に應用せんが爲の練習であるから、唱歌の際にも常に其要領を失はぬ様にして、唱はせねばならぬ。高音を發する時には低音を發する時よりも、一層多く吸氣せねばならぬ。特に女兒は肺尖にて淺く吸氣するものが多き爲め、豊富にして餘裕ある發聲を爲すことが出來兼ねる。腹部に吸氣するやうに練習せねばならぬ。

二、換聲法の不十分なること。

換聲法につきましては第二章に大体の説明をしておいた。文部省尋常小學唱歌は、兒童の音域を調査して作曲したものであるから、若し尋常小學唱歌中の歌曲が、そのまゝの調子で唱ひ兼ねる兒童は音域狭く聲の發達が充分で無いと思はねばならぬ。この音域と換聲法とは非常に大なる關係を有するものであるから、換聲法に能く注意したならば、あの歌曲が唱へぬ筈はないと思ふ。

三、アクセントの不十分なること。

アクセントは拍子の特徴を發揮するものであつて、曲想上非常に大切なものである。其のつけ方によりては、拍子の種類が變つた様に聞え歌曲の趣味を害ふやうになる。然しアクセントが餘りに強きに過ぐる時には、歌曲が野卑に聞えるから、其の程度を考ふる事が大切である。

四、拍子の不正確なること。

拍子と調子とは車の兩輪の如く、唱歌の二大要素とも云ふべきものである。而かもこの拍子を正しく唱ひ得る兒童は誠に少い。附點の有無、休止符の長さ等に於て、特にそれが甚しい様である。御互に十分注意して誤りなき唱歌を唱はせたきものである。

五、歌曲の速度の適當ならざること。

歌曲は夫々固有の速度を有し、勝手な變更を許さぬものである。其の速度を表示する機械をメトロノーム(拍節機)と云ひ、其の度盛りと速度標語とによりて、速度を會得せねばならぬ。

以上に記載せる五項目によく注意して唱はせたならば祝祭日に當り全校生徒合唱の場合に於ても調子が下る等のことは無きやうになることと思ふ

六、曲想の不充分なること。

教授要旨の章に於て説明したやうに、曲想は實に唱歌の生命であ

つて、唱歌科の教育的價值の大半は、此の曲想によつて左右せらるゝのである。然るに何れの歌曲も其の強弱緩急及速度等が、殆ど同一で、歌曲固有の趣味の發輝と云ふことを顧みざる教授を見ることがある。またたとへ曲想はついて居ても、誠に不自然にして歌曲と相應しないのを、聞くこともある。曲想の不充分なる唱歌によつて、どうして感情教育が出來やうか。兒童が趣味を以て唱ひ得るばかりでなく、社會一般の人々が、所謂學校唱歌の趣味を解し、風教上に唱歌を利用するに至るまで、御互に努力しようでは無いか。

如何にせば樂曲固有の曲想をつけ得らるゝか。

- 1、樂譜に記載されたる發想記號を、忠實に遵奉すべきこと。
- 2、發想記號の記載なき歌曲は幾百十回反覆練習する時は讀書

百遍意自ら通すと云ふ様なわけで、自然に會得さるゝものである。

3. 教授者相互の間又は教師につきて、研究すること。

七、樂譜教授の程度を一定すること。

一校内又は一郡一府縣内相協議し、樂譜教授上一定の標準を定め、是非共之れに準據するやうにしたいと思ふ。

或學級の教授者が、唱歌に堪能であつた爲め、兒童は唱歌に興味を持ち、幾何か樂譜を理解して唱つて居ても、其の受持教師が變つた爲め、兒童の技能も趣味も折角理解し得んとせる讀譜力もメチャ／＼にされてしまふ實例は少く無い。是れ實に非教育的も甚しいものではなからうか。之れ皆唱歌科教授進度の一定せざるより來る缺陷である。

八、正確なる音程と拍子とを、兒童に會得せしむること。

指唱法によりて音程練習を課する時、兒童は階名は間違へることなく唱つて居るけれども、其音程は随分あやしいもので、マルデはづれて仕舞ふこともあるにも係らず、何等の批正をも與へない授業を見ることもある。音程の正確ならざる指唱法は、音程の觀念を亂し、反つて不良の結果を生ずるものなることを忘れてはならぬ。

視唱法の場合に於ても、兒童は音程の實力乏しきばかりでなく、音符の長短も正確に知つて居らぬから、其の授業は樂譜を用ひたる聽唱法とも云ふべきもので、兒童は教師の範唱を模唱するばかりである。かくては寧ろ樂譜を用ふることなく、口授的に歌詞によりて、教へた方が早道である。それでは視唱法の意義は、何處

にあるのであらう。何時になつたら兒童の力によりて、新しき樂曲を唱ひ得るやうになるのであらうか。正確なる音程と拍子との觀念を與へて、視唱法の本旨に叶ふやうにつとめなくてはならぬ。

九、無邪氣にして癖の無き唱ひ方を爲さしむること。

どんなに唱歌に堪能な人でも、短所と癖とがあるものである。教授者は自分の短所と癖とを自覺し、之れを兒童に眞似させぬ様に注意せねばならぬ。

小學校は専門家を養成する處では無い。それ故に兒童の唱ひ方も、出来るだけ平凡にして特種なる流儀にとらはれないやうに、教授せねばならぬ。濫りに獨唱的の唱ひ方を眞似させる時には、悪い癖が出来て、進歩發達上の大妨害を爲すやうになるものである。之れを樹木に例へんか、未だ小さい木の内に、色々と枝ぶりをつ

くり、所謂作り松のやうにつくりあげる時には、其の松は遂には大樹に成ることも出来ず、又一旦作られたる枝ぶりは、直すことも變へることも出来なく成るものである。私は其の作り松的小さな歪んだものを好ましく思ふことが出来ない。自分の考としては、相當に成育するまでは、雜草を除き害蟲を取り、風雨の爲めに枝葉を害せられざるやうに注意して、其の成育を計り、相當の樹木となり生々した青葉のもえ出た後に於て、十分なる智識と經驗とある人によりて、其の枝ぶりを直し雄大にして趣味深き松を作りたいのである。

唱歌も小學校と中等程度の學校との間は、一定の流儀にとらはるゝことなく、つとめて癖の無きすなほな唱ひ方を爲さしめて、自然の發達を尊重し、中等程度の學校を卒業して後、特別なる研究

を爲さんとする人は、如何なる流儀の人につきて學びても、直に其の流儀を學習し得るやうに基礎を作つておかねばならぬと思ふのである。

一旦しみこみたる癖を、根本より破壊し、新に之れを教へなほすやうでは到底立派な唱歌者は出来るものでは無からう。

十、弱聲にて唱ふ場合を多からしむること。

聽唱法、視唱法、指唱法等、何れも初は弱聲にて拍子と調子とを理解しつゝ、唱はせねばならぬ。あまりに強聲なる時には調子と拍子との正確を缺ぎ易く、發聲も荒くなり、歌曲を記憶することも出来難いものである。それ故に新教授の場合には、つとめて弱聲を用ひしめ、曲想の段に至りて強弱緩急をつけるやうにしたいと思ふのである。然るに兒童は弱聲の時には音樂的美聲を以て

唱つて居るにも係らず、歌曲に習熟し起立して強く唱ふ時に至りては、非音樂的の蠻聲となるのが多いやうである。弱聲にて唱ふ時の發聲其の儘を、發達せしむることが肝要である。

十一、教授は形式に流れず、効果ををさめつゝ進行せねばならないこと。

教授の段階及授業の方法は、何れも之れを課する爲めの精神を考へ、無駄な手数と、不徹底な點とが無いやうな、授業をせねばならぬ。又授業には有機的の連絡が無くてはならぬ。發聲、音階、音程等の基礎練習と、歌曲の教授との間には一貫した連鎖がなくてはならぬ。氣息練習の時だけ氣息に注意し發聲練習の時だけ發聲を入ケ敷く云ふ教授の如きは基本練習の精神を了解せぬ人と云はねばならない。基本練習の應用として歌曲を教授するやうな考

でなければならぬ。

十二、唱歌科設備の不十分なること。

教具参考書教鞭物等が十分完備して居なくては理想的の授業は出来ぬ(教授用具の章参照)

十三、教授者實力の不足。

教師は

唱歌

樂器使用

樂典

教授法

右の四項目に精通熟達して居らねばならぬ。教授者と児童との實力の差が大なれば大なるだけ、教授に生命あり意義あり、活氣あ

り變化ありて、成績の見るべきものあることは、何れの學科も同一であるが、特に技能科にありては、教授者の手腕が大切なものである。

教授者の力が足らねば、児童は面白く無い。面白く無いから騒ぐ騒ぐ。から叱る。叱られると児童は一層面白く無い。……遂には其時間はメチャクに終る。斯かることが兩三回も続く時には、児童は先生はこはい。唱歌は面白く無い。厭な學科だと思ふやうになる。教授者も亦唱歌の授業は、児童が騒ぐからやりたく無い、と云ふ様に、御互に唱歌の授業を好まなくなつて仕舞ふ。「前の観える眼で、後も観ねばならぬ。」學年が進めば進むだけ、児童の唱歌が上達すればするだけ、益其の技能を磨き、教授者は常に數等上に居て、児童を導かねばならぬ。

十四、教授準備の不足なること。

準備は目的を達するが爲め、なくてはならぬ大切な段階である。此の準備の程度によりて教授の成績は定まるものである、と云つてもよい。

唱歌教授の準備としては、

- 1、教材の研究
- 2、呼節法の練習(一二三四と歌曲の拍子を口にて數ふること)
- 3、樂器練習
- 4、唱歌練習
- 5、樂典の研究
- 6、拍節法の練習
- 7、歌詞の讀方及意義と他の教科目との連絡關係

8、教授の順序即教案の八項目を要すると思ふ。

左に右の内二三だけ簡単に説明しよう。

1、樂器練習。

兒童は天氣の模様、授業時間前後の關係、身体上の關係等によりて、音域及發聲に若干の異同があるものである。それ故何れの歌曲にても、所定の調子より半音或は一音位上下しても、演奏することの出来る様に、練習しておかねばならぬ。兒童の音域以外の音を無理に唱はせる時は、遂には發聲機關を破壊する恐れがある。又伴奏ある歌曲は之れを彈奏して趣味の増進を計らねばならぬ。

2、拍節法の研究

曲想を遺憾なくつけしめんとする爲めには、拍節法によりて唱はしむるに勝るものは無い。然しながら拍子棒をふる順序を知り、手つきがよくなつたばかりでは、何等の効果をも擧ぐることは出来ぬ。歌曲に對する曲想を十分に會得し、其の感情が自然に手と舉動とにあらはれて、初めて精神のこもれる拍節法となるべきものなることを、忘れてはならぬ。

3、教授の順序即教案

唱歌科は他の教科目と異り、兒童の成績と氣合とによりて、其の教法を考へ進度を計つて行かねばならぬ。豫め記載したる教案の如く、すらくと進行することは無いものと思はね

ばならぬ。それ故斯くなれば此くすべしと各所につき、二重にも三重にも、案を立て、置くことが必要である。

4、教材の研究

此の題材は如何なる教育的立場より選定せるものなるか、此の歌曲を如何なる訓育的材料となすべきか、如何なる感情陶冶を目的とするか、此の教材によりて如何なる技術上の練習を主眼となすべきかと言ふやうなことを考へておかねばならぬ。(教授細目編製の章参照)

先年東京朝日新聞文藝欄の記者吹不斷氏が掲載した「現代洋樂家に對し一鞭を加へて」と言ふ論說の概要を、次に紹介しよう。

要するに現今の洋樂家の多くは、意義深き西洋音樂を皮相に弄び有意識又は無意識に喜劇を演じて、喜んで居るものである。然る

に一方に於ては、新時代の人間は藝術に對して、新しき要求を起して來た。藝術を單に高尚な娛樂として見るに耐へずして、之れを自家の生活との痛切な交渉を見出さうとした。随つて此處に求められるのは、單なる技巧ではない。技巧を通して躍動させられる、深い意義と生命とである。(勿論全然技巧を忘れて、意義のみを考ふるは藝術の本義を知らない謬見であるが)。此の傾向は近く進んで、劇壇に對して動いて來た。此の新思潮の波動は、恐らく遠からずして音樂界に押し寄せて來るであらう。現在既に其の兆候と認むべきものがあるやうに思はれる。表象の媒介を借らずして、情緒を動かす力ある音樂は、他の藝術よりも一層痛切に、人間の内心に觸るゝことが出来る。殊に意と智との生活よりも、寧ろ情調の生活を味はんとする現代人は、音樂を要求するの念が深

からねばならぬ。

現今歐洲各國に於て、文學演劇にも増して、音樂が頗る盛んであるやうに思はれるのも、這般の消息を洩らすものではあるまいか。今日尙此の要求が日本に於て、力強く發表されてゐないのは、偏に現代人の聴力がまだ修練されてゐない爲めではあるまいか。新時代の人間の耳が、次第に啓發せられて來る時は、音樂に對する新しい要求が、鬱勃として起るであらうと思ふ。其の際求めらるゝものは音樂の曲調に止らず、更に曲調を通じて示される曲想である。曲想の齊す生命である。單なる神經の刺激でない、精神の感應である。

現今の洋樂は、畢竟するに單に手と指と喉と舌との音樂であると言つても、強ひて誣言ではあるまい。斯かる音樂家に對して、魂の籠つた音樂を求むるは、恐らく求むるものゝ贅であらう。云々。

第八章 變聲期兒童の取扱

一四二

人により地方により變聲期に入る時期にはそれ／＼相違があつて、一様には云ひ得兼ねるものであるが、平均男兒は十三四歳、女兒は十一二歳で變聲期に入るのが普通である。

此の期に至る時には喉頭の解剖的成長發達につれて、聲帶の發達も著しいものである。特に男子に於ては小兒の時に十一ミリメートル即ち五分七厘から五分九厘餘の長さを増すものであるのに女子は同じく小兒の時に十一ミリメートル即ち四分一厘餘が四分四厘餘の長さとなるに過ぎない。此の時期に於て男子は聲音が急に低くなつて、終には一オクターフ降下する様になる。

此の期間を變聲期と稱し聲帶は至つて纖弱であるから聲の疲るゝこ

ども甚しく、又發聲上非常なる苦みを感じるものである。

此變聲期にある兒童は唱歌上如何様に取扱てよきか、次に其の二三を述べよう。

- 一、歐米諸國の有名な人の考を見ると變聲期には唱歌させない様にした方がよい。と云ふ意見が多い。
- 二、變聲期の兒童に對しては、決して強聲を用ひしめてはならぬ。又高音を長く出させることもわるい。中位の出しいゝ聲で數秒時間練習を續ける位にした方がよい。體操の時や休憩時間中に叫聲を發することも、謹まねばならぬ。
- 三、此の期に屬する兒童の發聲し得る最高の音は「變ロ」音で最低は「ト」音であるから、歌曲の調子を移調して右の音域の内にて唱へるやうにしてやらねばならない。

一四三

尙移調することなく原調のまま全部を假聲を用ひて唱はせる方法もある、之れは至つて好成绩を示して居ることである。

- 四、一學級の兒童を變聲前、變聲後の兩組に分ち、各組の音域に應じて歌曲の調子を適當に移調して唱はしめ、又一部の兒童の唱歌する際には他の部の兒童には極めて靜肅に之を聴かしめて耳と音樂的思想の涵養につとむることも頗る大切なことである。
- 五、變聲期兒童の爲めには蓄音機によりて良いレコードを聞かせるのも音樂趣味向上の爲め頗る良法である。
- 六、蓄音機のレコードを聞かせるのと同じ意味に於て、善き唱歌やピアノやヴァイオリン等を聞かすのもよろしい。
- 七、音樂者の傳記、音樂史の一端を授け又は簡易なる作曲法を學習せしむるもよろしい。

八、ピアノ、オルガン等の器樂の練習を課することは頗る良き方法である。

以上色々な窮策的方法はあるが、ついでなる所、唱歌は成るべく之れを避け、止むを得ざる時は調子を下げるか、假聲にて極めて弱く聲帯の疲勞せざる程度に於て之れを課し、且音樂的趣味向上の爲め器樂の練習を奨勵するのが宜しいと云ふのである。

唱歌法と發聲法參照)

第九章 唱歌科の振興方案

前述の諸章は、皆救済方案であると同時に振興方案ならざるものは無いが、更に左に二三の方法を述べよう。

一、善き音楽を聞くこと。

唱歌の上達を計る爲めには、聴覚機と發聲機との發育を計らねばならぬことは、前述の通であるが、此の兩機關の中でも、耳は指導者にして聲は從屬者たるの關係がある。耳の發達せない人は自分の技術にも兒童の唱歌にも直に満足し、それ以上には進歩しないものである。聲が悪くても耳の發達し音樂的理解のある人は、これではいかん、あれでは悪いと、色々と苦辛して研究するから、段々と其の技能が進歩するのである。耳を養ひ、音樂的思想の向

上を計る爲めには、善き音楽を度々聞くに越した良法は無い。

二、職員の唱歌研究時間を定むること。

毎週所定の日、所定の時間に、職員一同唱歌教室に集り、

- 1、新歌曲の紹介。
- 2、教材の研究。
- 3、教授細目の改善。
- 4、教授上の打合。
- 5、曲想の研究。
- 6、豫備音程及基本音程の研究。
- 7、拍節法の研究。
- 8、教授の順序方法に關する研究。
- 9、唱歌科と他の教科目との連絡關係。

10、職員相互に授業して、一面には授業上の批評をなし、一面には各學級の題材及教授法の統一を計る。

等、眞面目に研究したならば、常に兒童の成績が上達するばかりでなく、學校内唱歌科の統一が出来て、種々なる利益が頗る多い。

三、盛に音樂會を開催すべきこと。

唱歌の普及發達を計り、音樂趣味を養成せんが爲めには、音樂會に勝るものは無い。

音樂會開催の順序としては、

- 1、兒童一人一人の唱歌を善くすること。
- 2、一學級の唱歌を善くすること。
- 3、各學級にて唱歌時間中に學級音樂會を開くこと。(既習曲練習の意味を以て)

4、一學校内の音樂會を開催すること。

イ、始は内部だけの音樂會とし、

ロ、兒童の成績稍良好なりと認むる時は、父兄を招待すること。

ハ、公開的音樂會を開催すること。

此の場合には職員の合唱獨唱又は樂器の、合奏を多く出すべきこと。

5、組合學校連合唱歌會を開くこと。

6、一郡連合唱歌會の開催。

7、一府縣連合唱音樂會の開催。

以上の三項目が頗る大切な救濟方案であるが、それにも増して最も有効なる救濟策がある。それは府縣市郡視學諸君及各學校長諸君が、實驗的見地より、適確なる批評眼を以て、各學校内の唱歌につき、

批評も爲し指導も爲し、獎勵もして戴きたいことである。

校長自身に授業して貰ふことが出来るならば此の上は無いけれども、之れは特別な人で無くては、望み難きことゝ思ふから、せめて批評的要項につき十分なる研究を爲し、實地授業を見ては正邪善惡を理論上より批評し、又他の數學や國語の誤を批正するやうに、唱歌の誤を指摘しては、之れを指導して戴くことが出来たならば、之れに勝る獎勵法は無からうと思ふ。

現今唱歌ほど誤の多い學科は無い。其誤を知らずして教授し、知らずして教はつて居るものが少く無い。校長や視學が參觀しても、其の誤が無事に通過して居ると云ふことは、實に悲しむべき極である。「唱歌は折角様々の工夫を凝し、研究的の授業をしても、校長が何とも云つて呉れぬから、張合が無くてつまらぬ」と云ふやうな先生の不

平も、度々耳にする所である。

然しながら視學及校長の中には、随分熱心な音樂獎勵家及技術家があつて自ら唱歌の授業をなし、又唱歌科の講師として、地方に招請せられ、音樂會の度毎に獨唱もし、又タクト棒を以て、自ら兒童を指揮して唱はせらるゝ人を、幾人も知つて居る。此等の諸君に對しては、本邦音樂の爲め、中心より感謝と敬意とを拂つて居る次第である。

第十章 唱歌科の設備

唱歌は前述の通り、感情的學科であるから、其の教室は衛生上の注意は云ふまでもなく、適當なる裝飾を施し、教室に入りたるだけで、心情を快活雅正ならしめ、愉快に學習し得るだけの、設備が無くてはならぬ。

其の設備の一斑を次に説明しよう。

第一節 唱歌教室

- 一、位置 日あたりと通風とよく、其の他一般衛生上の諸要件に、叶ふべき處なるべきことに、体操教室及手工教室とは、遠ざかりたる處を選ぶべきこと。
- 二、廣さ 長さ五間幅四間位とし五六十人の兒童を容るゝに、

適當なるべきこと。

- 三、高さ及天井 高さは八尺位とし、天井には相當なる反響をつくる爲めの、設備あるべきこと。

既に出來上がりたる教室にして、反響の少き時には、天井に金線を張りつけてもよい。

- 四、壁 反響をよくし、且つ他の教室に聲音の漏洩を妨ぐ爲め、壁の中、天井、床下等に粗を容るべきこと。

- 五、唱歌中は呼吸作用特に盛なれば、塵芥の飛散することは、甚有害である。之れを豫防めんが爲め、床板に上敷を敷くべきこと。

- 六、窓及入口の戸に羅紗を張り、音響の漏洩を妨ぐべきこと。
- 七、音樂に關する偏額をかけ、花を生け、其の他適當なる裝飾

を施すべきこと。

八、唱歌科の特別教室無く、授業時間毎に風琴を持運びて、授業して居る學校がある。生理及衛生上より見ても、美育及徳育上より論ずるも、樂器の保存上より見ても、あまり喜ばしく無いことと思ふ。

第二節 樂器

唱歌教授上最良の樂器はピアノである。オルガン之れに次ぎ、ヴァイオリンは奏法に熟達したものでなければ之れを用ひざる様にしたと思ふ。

一、ピアノ　ピアノは其の音色明瞭爽快であつて、兒童の心情を快活勇壯ならしむる爲め、最も有効である。ことに其の音が一音づゝ切れるから、兒童は教師の範唱を聞き易く、教師は兒童の唱歌を批正する爲めに頗る好都合である。唱歌に活氣をつくる爲めにも、拍手を明瞭に知らしむる爲めにも、頗る便利である。且又唱歌と伴奏とは、重大なる關係を有し、伴奏なき唱歌は背景無き繪畫の如く、眞の美感の出るものではない。そして其の伴奏はピアノに依らねば、到底弾き得られぬものである。

二、オルガン　現今我國の小學校にて、最も普通に使用されてゐる樂器は、オルガンである。然るにオルガンは、其の音色に變化少なく、活動性に富める兒童の唱歌教授用としては、ピアノの様な良い樂器と云ふことは出来ぬ。然し發聲練習の爲めにはオルガンが一番好都合である。

三、ヴァイオリン　此の樂器は非常に巧妙輕便に出來て居るば

かりで無く、其の音色が人聲に近きを以て、唱歌教授用都合よき樂器なることは明かである。されど此の樂器は、演奏者が音の高度を定めて行かねばならないから、餘程の熟達を必要條件とする。

第三節 教授用具

- 一、メトロノーム 歌曲の速度を測定する爲めに、使用する機械である。
- 二、拍子棒 拍節法によりて教授せんとする場合には、是非共必要なものである。
拍子棒には黒色白色等、種々なる種類があるけれど、白色にして輕きものが、使用に便なるものと思ふ。黒色は遠方より見え兼ね、重きは腕の疲るゝきらひがある。

三、黒板 長さを二間とし、其の内一間には五線を記入し、残りの一間は普通の黒板となすか。長さ一間のもの二枚を重ね、各々別々に上下に動かし得る設備と爲し、其の一枚には五線を記入し、一枚は普通用のものとなし、入用に應じ之を上下して、使用するもよい。

右二様の黒板の外、幾枚かの小黒板を用意し、教授の準備を爲すことも必要である。

四、生徒用椅子 三人掛とし後部に幅四五寸位の板をつけ、机代用と爲したるものがよからう。其の小板を金屬製蝶番にて動搖し得る様に作りたるは、反りて破壊し易い。椅子の高さも兒童の身長に應じて、二種類若しくは三種類を要するものである。

五、唱歌用掛圖 教授細目中の音程、歌曲等を、種々なる考案によりて掛圖となし、教授上の便と教授材料の統一とを計らんとするものである。

六、口形圖姿勢圖音階圖 之れにも色々の種類があるから、實物につき能く研究して求めたいものである。

第十一章 唱歌教授上の注意

一、兒童の自然的進歩を尊重すべきこと。

兒童は自然の發育と共に、其の音量も音域も段々と進歩發達するものである。教師が自分の技能によりて兒童を導かんとすれば、教師の短所をも兒童に真似せしむることとなり、遂には其の進歩を阻害する様になるものである。それ故兒童自然の發育を尊重し、教師は兒童が間違つた方面に進まんとする時、之れを説明し指導して、正しき方向に向はしめ、再び兒童の自發的進歩に任せねばならぬ。

二、能く出来る兒童が慢心を起さぬ様に、出来ない兒童が悲觀せぬ様に教授せねばならぬ。

兒童の中には善きも悪しきも、千種萬様秋の千草の咲き亂れたやうである。中にて優良兒童はいつもく譽めたゞへられ劣等兒は叱られ通じて居る様では、優良兒は自負心を生すべく劣等兒は悲觀して奮勵努力の氣力を失ふに至るばかりで無く、遂には唱歌を嫌ひ、先生までを恐るゝに至るものである。それ故に善き兒童は發聲曲想音程等、細末の點に到るまで、丁寧に批正を與へて、自分はまだ未熟である、もつと奮勵努力せねばならぬ、と云ふ心を起さしめ、又悪しき兒童も其の努力を認めてやつて、比較的よく出來た時には、衰心より譽めてやり、獎勵鼓舞してやらねばならぬ。

三、教師は兒童と同じ心理状態となつて教へねばならぬ。

尋常科一學年の兒童を教へる時には、先生も一學年の兒童と爲つ

た心持となり、六學年を教へる時には六學年の兒童となつた心持にて、教授せねばならぬ。

一年も六年も同じ様な心持と態度とで授業しても、兒童に共鳴あり同情ある授業は、決して出来るものではない。

四、歌曲の精熟を期すべきこと。

徳性の涵養、美感の養成、感情の教育、耳及發聲機關の發育等、總ての教育的價値は、歌曲に習熟し理解し、眞に歌中の人となつて歌ふ時に至り、始めて効果あるものなることは、前述の通りである。而かも精熟に至らざる歌曲にありては、何等の價値を有せざるばかりで無く、却つて有害なることを忘れてはならぬ。かゝる意味より、歌曲の多きを欲せず、其の習熟につとめ、反覆練習して、教育的價値の徹底に、つとめなくてはならぬ。

五、児童の活動性を、巧に利用すべきこと。

活動性盛なる児童を教ふるは、恰も駿馬を取扱ふが如く、其の活動性を巧に利用する時には、日毎々々に其の進歩を認め得べく、之れが利用を誤るか、若しくは之れを抑壓せんとする時には、却つて嫌厭の心を起し、其の進歩を防ぐるものである。

「してはならぬ」と言ふよりも、「かくすべし」と命すべきこと。「悪い」と云ふよりも、「それよりも之れがよい」と比較すべきこと。

「静かにせよ」と命するよりも、一定の仕事を課すべしこと。

六、児童の聲が悪いとか、調子が悪いとか、唱歌に興味を持たぬとか、唱歌教室で騒がしいとか、是れ皆授業の拙劣なると、技能の不足なるとより来るものである。田舎の子供は都會の子供の様には行かぬとの聲を耳にすることがある。けれども是れ亦教授者の

技術より生れて来る、結果なることを想はねばならぬ。

之れを要するに、児童は鏡にして、教師は其の實體なることを想ひ、児童に對して不満足なる點の有る度毎に、教授者は自ら反省し、其の全責任を双肩に擔つて立たねばならぬ。無邪氣にして自然なる児童を叱ることは、決して出来ぬ。

それと共に児童の成績の向上せる時には、是れ亦教授者自ら向上せる心持となつて、相共に喜ばねばならぬ。

七、児童の爲めに題材を撰擇し、児童の爲めに犠牲となつて、教へねばならぬ。

往々にして教師の趣味によりて教材を選び、困難なる題材をも無理に授業して居る人を見ることがある。是れ實に児童には氣の毒の極ではなからうか。學藝會、父兄會、音樂會等に出演せしめん

が爲め、日常は極めて平易なる歌曲を教へて居るにも係らず、一足飛びに教授者にも六ヶしきやうな難曲を選び、音域も曲想も顧みず、無理おしに教授して居る。而かも毎日放課後遅くまで児童を殘して。自分はかゝる事を見聞する毎に、児童に對する同情の念、實に禁じ難きものがある。

八、教授は變化と趣味と氣轉とあるべきこと。
變化は趣味を生み、趣味は進歩の第一條件である。何時も同じ様な氣のきかぬ授業ほど、飽きつぼくて面白く無いものはない。教案は大体の順序を定めたもので、眞の生命ある教授は、直接児童に接し、其の成績と趣味の程度とによりて、時折變つて行かねばならぬ。

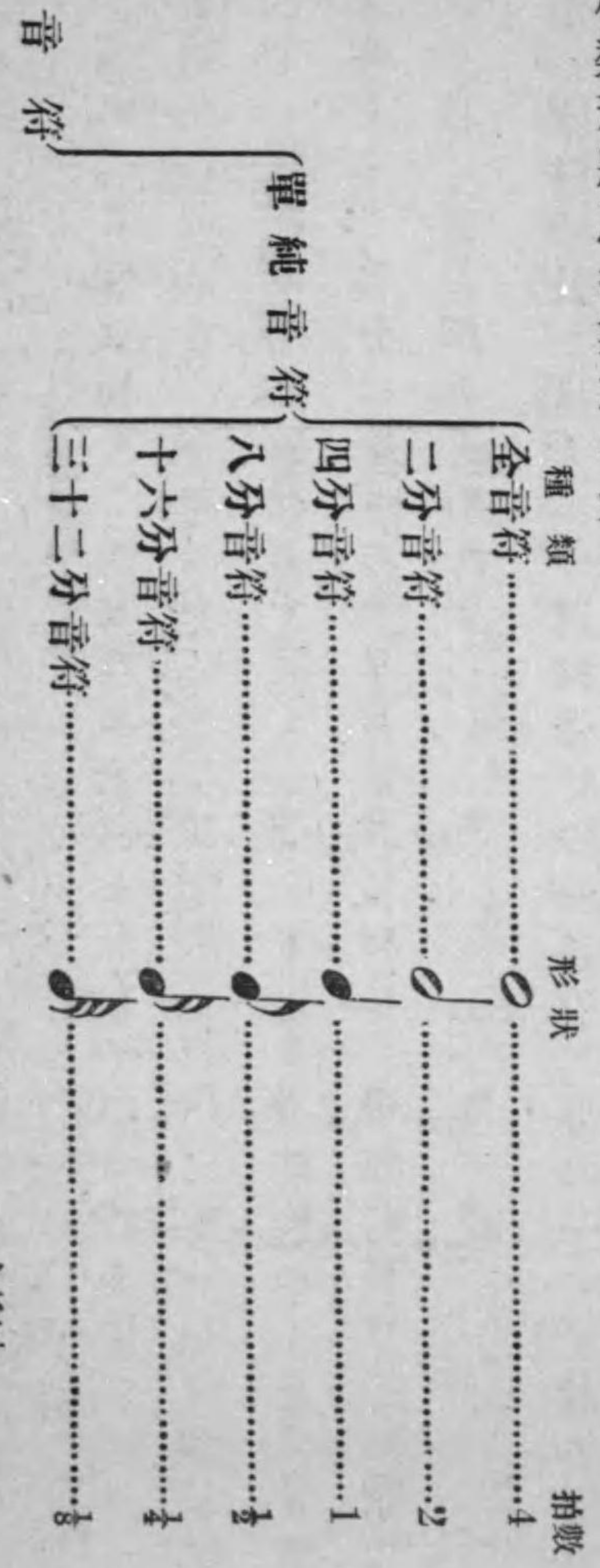
第十二章 小學校兒童に教授すべき樂曲の大要

樂典

音樂の演奏法に關する一切の規則を樂典と云ふ。

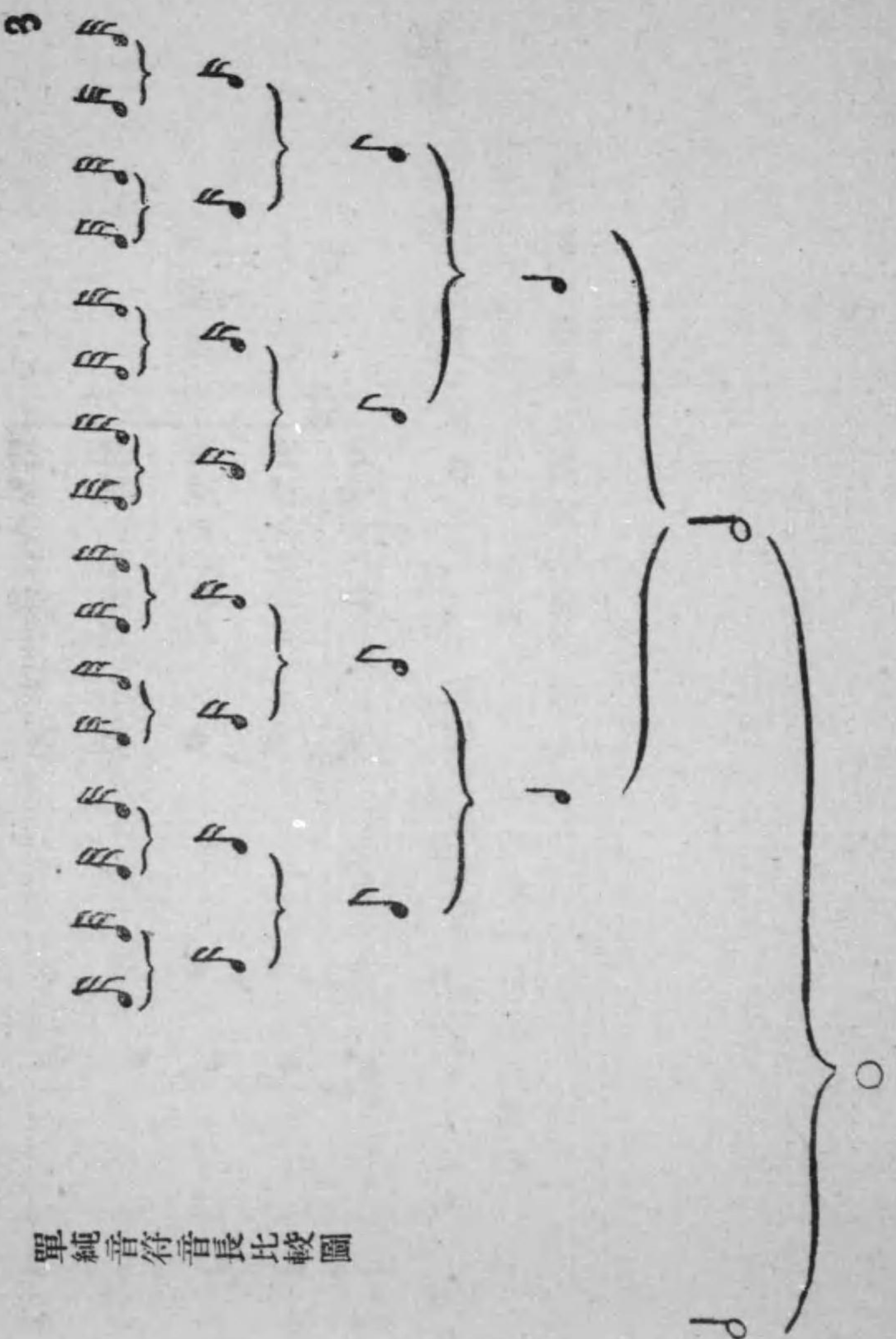
第一章 音符

音の長短を表はす記號を音符と云ふ。其種類形狀及拍數左の如し。



附點全音符.....			$6 = 4 + 2$
附點二分音符.....			$3 = 2 + 1$
附點四分音符.....			$1\frac{1}{2} = 1 + \frac{1}{2}$
附點八分音符.....			$\frac{3}{4} = \frac{1}{2} + \frac{1}{4}$
附點十六分音符.....			$\frac{1}{8} = \frac{1}{16} + \frac{1}{16}$

規則 附點の長さはもとの單純音符の音長の二分の一とす故に附點音符の音長はもとの單純音符の音長の一倍半に當る。



單純音符音長比較圖

第二章 休止符

音の休止する長さを表はす記號を休止符と云ふ。

其種類、形狀及拍數次表の如し

休止符

單純休止符

附點休止符

全休止符 二分休止符 四分休止符

八分休止符 十六分休止符 三十二分休止符

附點全休止符 附點二分休止符 附點四分休止符

附點八分休止符 附點十六分休止符

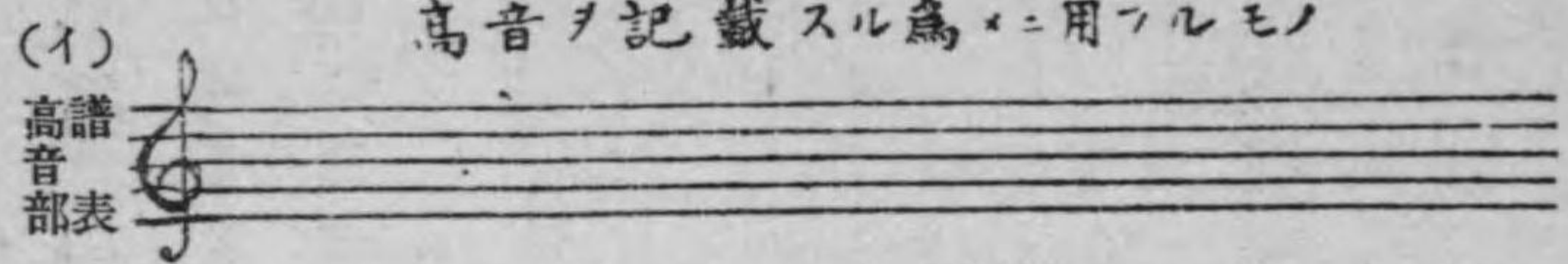
6 拍 3 拍 1 1/2 拍

3/4 拍 3/8 拍

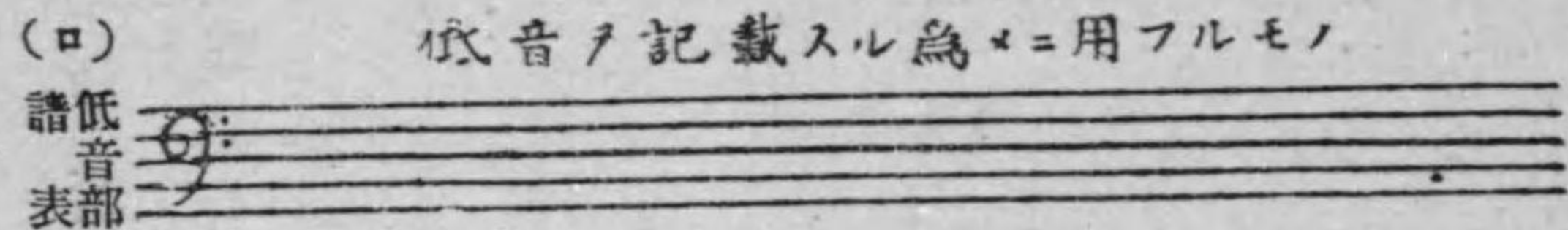
規則 附點休止符の長さはもとの單純休止符の長さの一倍半に當る。

第三節 譜表の種類

高音ヲ記載スル爲メニ用フルモノ

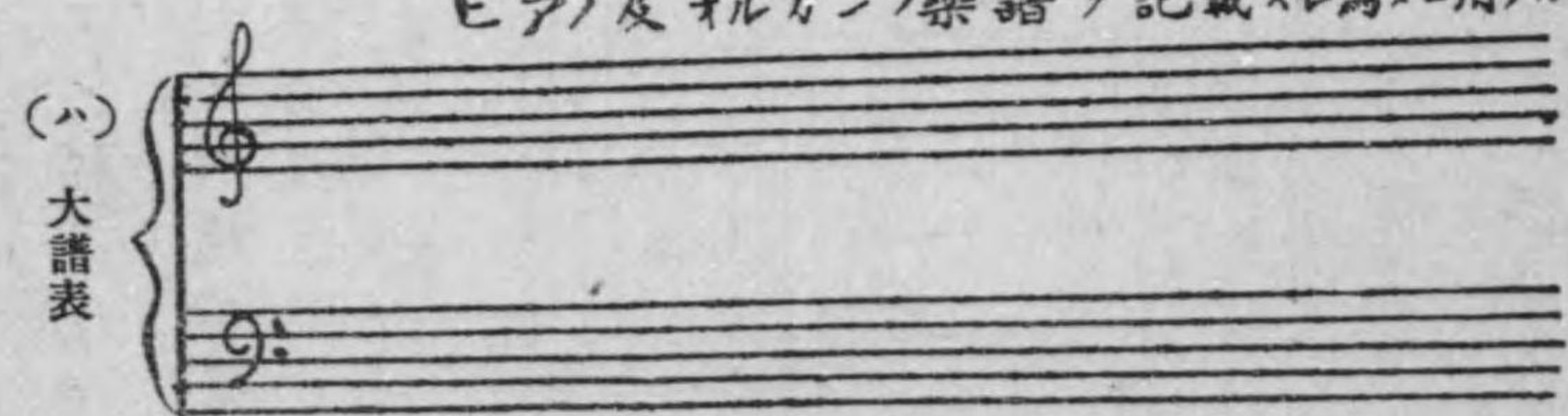


低音ヲ記載スル爲メニ用フルモノ



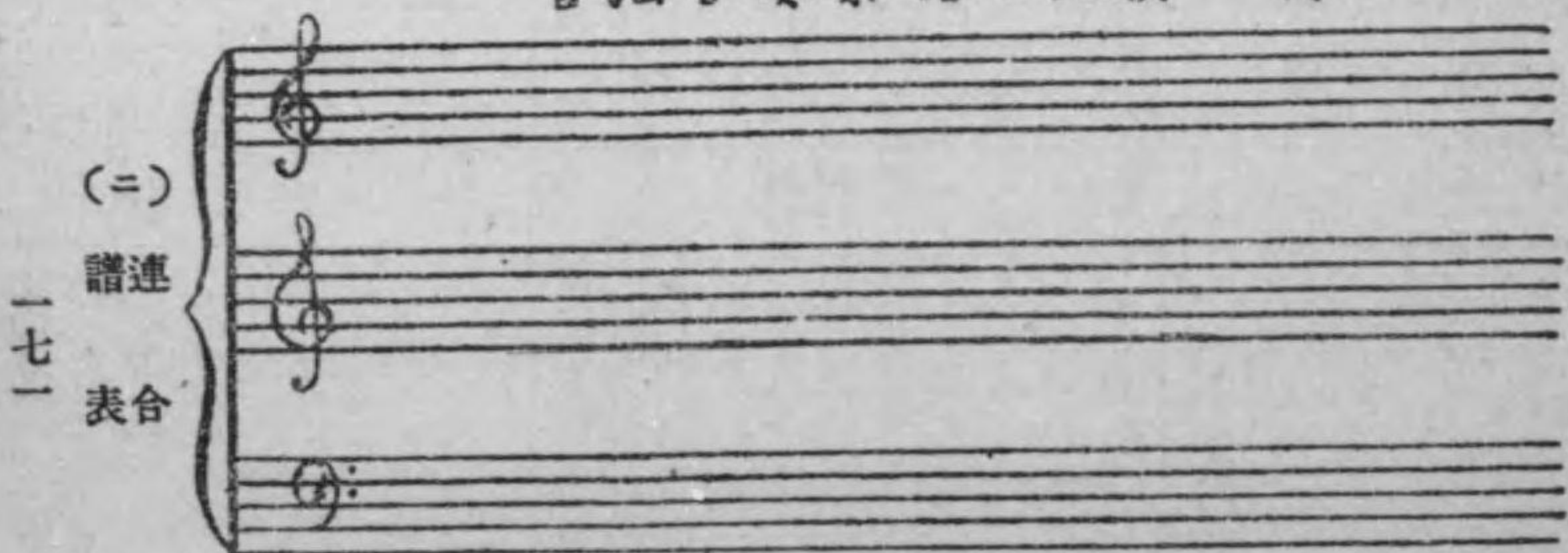
二個ノ譜表ヲ連ネ

ピアノ及オルガノノ樂譜ヲ記載スル爲メニ用フルモノ



三個以上ノ譜表ヲ連合シ

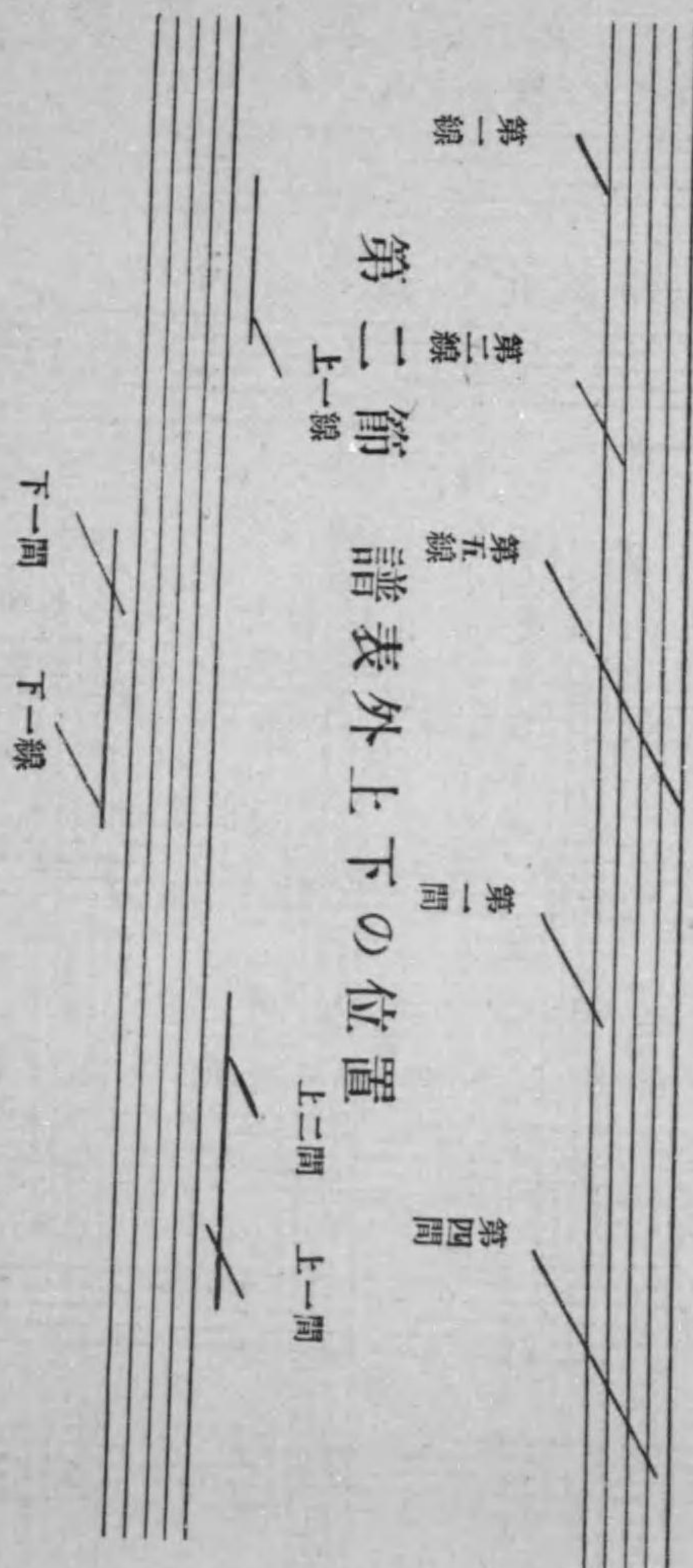
管弦合奏樂譜ヲ記載スル爲メニ用フルモノ



第三章 譜表

譜表は同長同距離なる五條の平行横線より成り音符若しくは休止符を其上に記載して音の高低を表はす爲に用ふ。

第一節 譜表上位置の名稱



第四節 音名及譜表上半音の位置

音の高度に従ひて名づけたる名稱を音名と云ふ
音名を音表に排記すれば次の如し

最低部音
一音 (イロ) (ハニ) (ニハ) (ニホ) (ホニ) (トイ) (イロ) の間
低部音
基礎音
高部音

第四章 音階

八音を規則正しく排列したるものを音階と云ふ。
其規則に二種あり。

第一節 長音階

第三音と第四音との間及第七音と第八音との間に半音を有し其他の二音間は總て全音なる八音の一例を長音階と云ふ。

第二節 短音階

第二音と第三音との間及第五音と第六音との間に半音を有し其他の二音間は總て全音なる八音の一例を短音階と云ふ。
短音階には三種の種類あり。

長短兩種の音階を圖解對照せば次の如し。
附 階名 音階の各段階につけたる名稱を階名と云ふ。

(3) 旋律的短音階
下行 上行

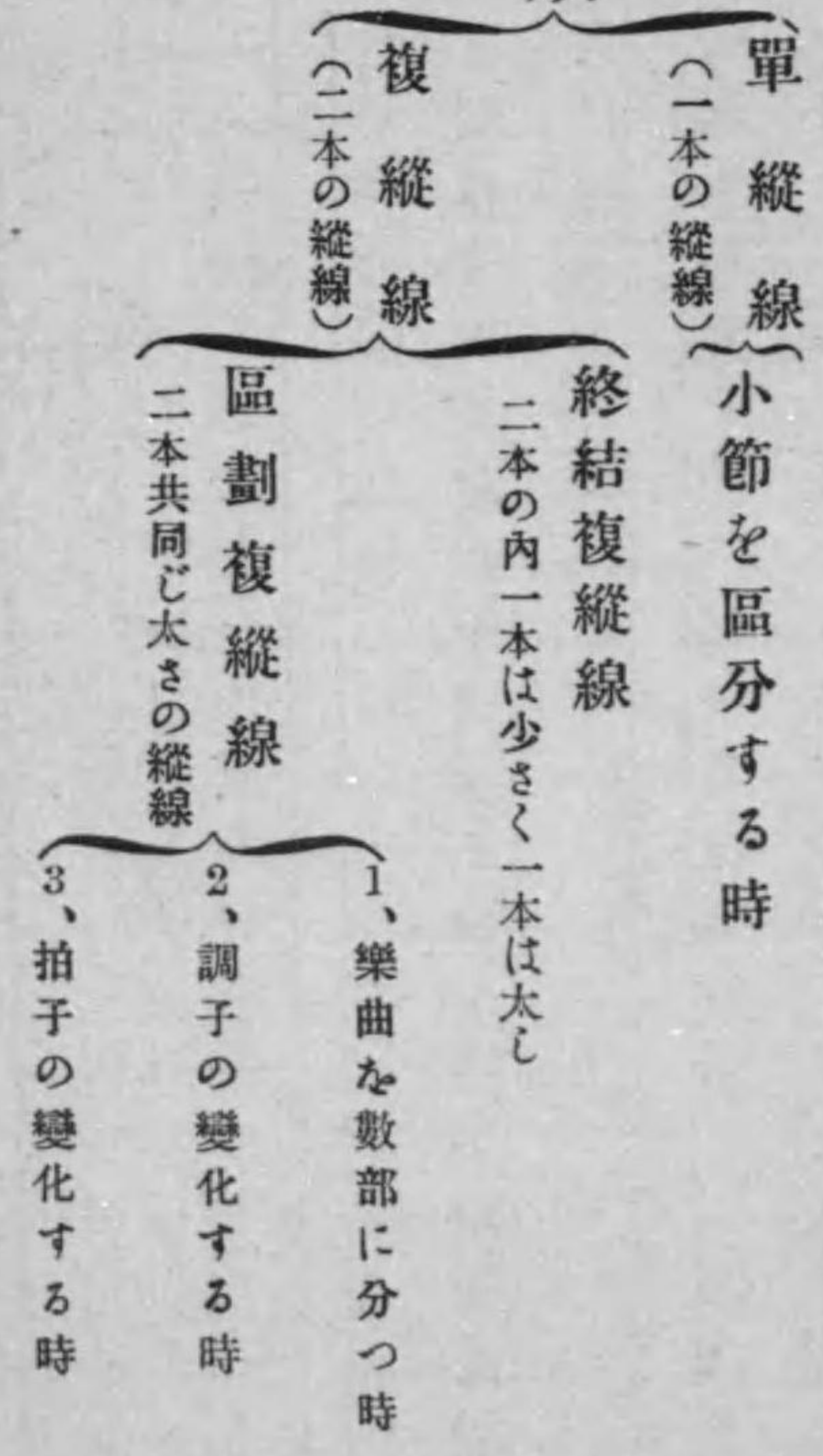
(2) 自然的短音階

(1) 長音階

第五章 縱線及小節

樂曲中強弱の部分區別せんが爲め之を分ちて各等一なる時價を有する小部分となす之を分つには譜表を縦に貫通する直線を以てす之を名けて縱線と云ひ縱線と縱線との間を小節と云ふ。

縱線の種類



第六章 拍子

小節中に於て其強弱の部分を定め其存在を明にしたるものを拍子と云ふ。

拍子の種類を表はす記號を拍子記號と云ふ拍子記號は樂曲の初め音部記號の直次に記入するものとす。

拍子記號には通常分數を用ひ其分母は音符若しくは休止符の種類を示し分子は分母にて示されたる音符若しくは休止符が各一小節間に存在すべき個數を表はす。

例へば $\frac{3}{4}$ は各一小節間に四分音符二個若しくは之と同じ時價を有する音符又は休止符が存在すべきことを示すが如し。

第一節 拍子の種類



各小節内に於ける強弱の位置は次の例に示すが如し。

